

# 大山崎町埋蔵文化財調査報告書

第 53 集

—平成 29 年度国庫補助事業調査報告—



2018

大山崎町教育委員会





第3調査区全景オルソ画像（PhotoScan を使用）（1 / 50）



# 序

本書は、平成 28 年度と平成 29 年度の国庫補助事業として実施した 1 件分の発掘調査内容をまとめたものです。

今回の調査は、大山崎瓦窯の北半部の遺構の実態を把握する目的で調査を実施しました。調査の結果、8 号窯の北側に瓦の廃棄土坑を検出しました。このように北半部においても瓦窯の周辺に遺構が広がることを確認しました。

こうした成果は、大山崎町の歴史を考える上で欠かせない資料であります。また、得た資料は、展示・公開を通じて生涯学習の場で広く活用し、郷土の貴重な文化財として受け継いでいく所存でございます。

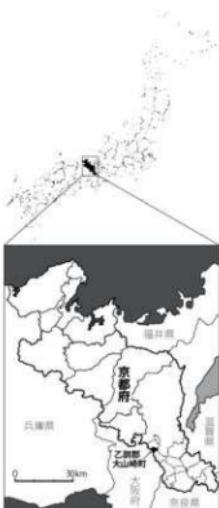
最後になりましたが、現地調査をはじめ、本書の作成に際しては、土地所有者であります観音寺住職様をはじめ、関係各機関・多くの皆様よりご高配を賜りました。深く御礼申し上げます。今後とも、文化財の保護と普及に全力を尽くす所存でありますので、変わらぬご支援を賜りますようお願い申し上げます。

平成 30 年 3 月

大山崎町教育委員会  
教育長 清水 清

## 例　言

1. 本書は、国庫補助事業として大山崎町教育委員会が平成28・29年度に実施した発掘調査の調査報告である。
2. 地形区分については、「1：25,000土地条件図京都南部」(国土地理院1966年印刷)、「長岡市域地形分類図」(『長岡市史』資料編一付図2,1991年)を参照した。
3. 座標系は、日本測地系(国土座標軸第6座標系)を従来通り用いたが、世界測地系を併記した。両座標系での変換作業は行わず、各座標系の基準点から、測量作業を行った。
4. 調査次数については、以下の略号を用いた。  
長岡京跡右京(R)、同左京(L)、遺跡確認調査(IK)、山城国府跡(K)、山崎津(T)、山崎城跡(YJ)
5. 調査地区名は、高橋美久二「長岡京跡昭和51年度発掘調査概要」(京都府教育委員会『埋蔵文化財発掘調査概要』1977)による小字名を基にしたアルファベット表記の地区割に準じ、同一地区内における調査回数はアラビア数字を末尾に示した。
6. 発掘調査では、以下の方々の参加・協力を得た。記して感謝したい。  
調査作業員：登山貞男・山口鉄男・山副洋治  
全京都建設協同組合・株式会社サポートスタッフ  
整理員：岡本弓美子・村上優美子  
株式会社文化財サービス
7. 現地調査は、大山崎町教育委員会事務局を調査主体とし、第1調査区・第2調査区を生涯学習課 文化芸術係主幹 古閑正浩、第3調査区を同係主事 角早季子が担当した。
8. 文化芸術係 八木麻里の助言・協力を得て、本書の執筆は古閑・角、編集は角が当たった。
9. 本書に掲載した遺構写真を、古閑・角が撮影した。遺物写真を、楠華堂 内田真紀子、角が撮影した。遺物、図面、写真は大山崎町教育委員会で保管する。
10. 調査の実施にあたっては、土地所有者の方のご協力を得た。  
現地調査にあたっては、多くの方々からご指導・ご助言をいただいた。  
また、6月17日に行った現地説明会では、多くの方々からご指導・ご助言をいただいた。
- 瓦の資料調査にあたっては、(公財) 京都市埋蔵文化財研究所、吹田市教育委員会にお世話になった。
11. 表紙カット：OY208 報告番号52 (S=1/8)



## 目次

巻頭図版

序

例言

目次

第1章　はじめに	1
第1節　調査の経緯	角 1
第2節　調査の経過	角 4
第2章　基本層序と検出遺構	7
第1節　第1調査区	古闇 7
第2節　第2調査区	古闇 8
第3節　第3調査区	角 9
第3章　出土遺物	15
第1節　はじめに	角 15
第2節　平安時代の土器、鉄器	角 15
第3節　平安時代の瓦類	角 17
第4節　中世から近世の遺物	角 27
第4章　まとめ	29
第1節　調査成果の概要	角 29
第2節　大山崎瓦窯の窯の構築順序	角 29
第3節　おわりに	角 34
付表　出土遺物観察表	37
図版	PL. 1 ~ 16
報告書抄録	



# 第77次遺跡確認調査（7 YYMS'SS-15地区）報告

## ～大山崎瓦窯の調査～

### 第1章 はじめに

#### 第1節 調査の経緯

大山崎瓦窯跡では、これまでに12回の発掘調査を行っている。南半部で10基、北半部で2基の瓦窯を確認した。窯の残存状況が良好であり、平安京造営を考えるうえで重要な遺跡として南半部が国の史跡に指定されている。

南半部における窯の配置は、焚口を南に開く一群（1・9～12号窯）（以下A群瓦窯とする）と焚口を東に開く一群（2～6号窯）（以下B群瓦窯とする）に区分される。A群瓦窯とB群瓦窯は、ほぼ直角（85.91°）に位置する。両群瓦窯はいずれも5基の窯を有し、個々の瓦窯は約6mの間隔で規則的に配置される。窯の背後約4.5mには窯に平行して排水溝がめぐる。また、焚口前面のピットは規則的に配置され、前庭部を覆う掘立柱建物の存在がうかがえる。A群瓦窯とB群瓦窯の背後の空閒地には土坑SX10を検出した。焼き損じた瓦が大量に出土したことから、廃棄土坑と考えられる。

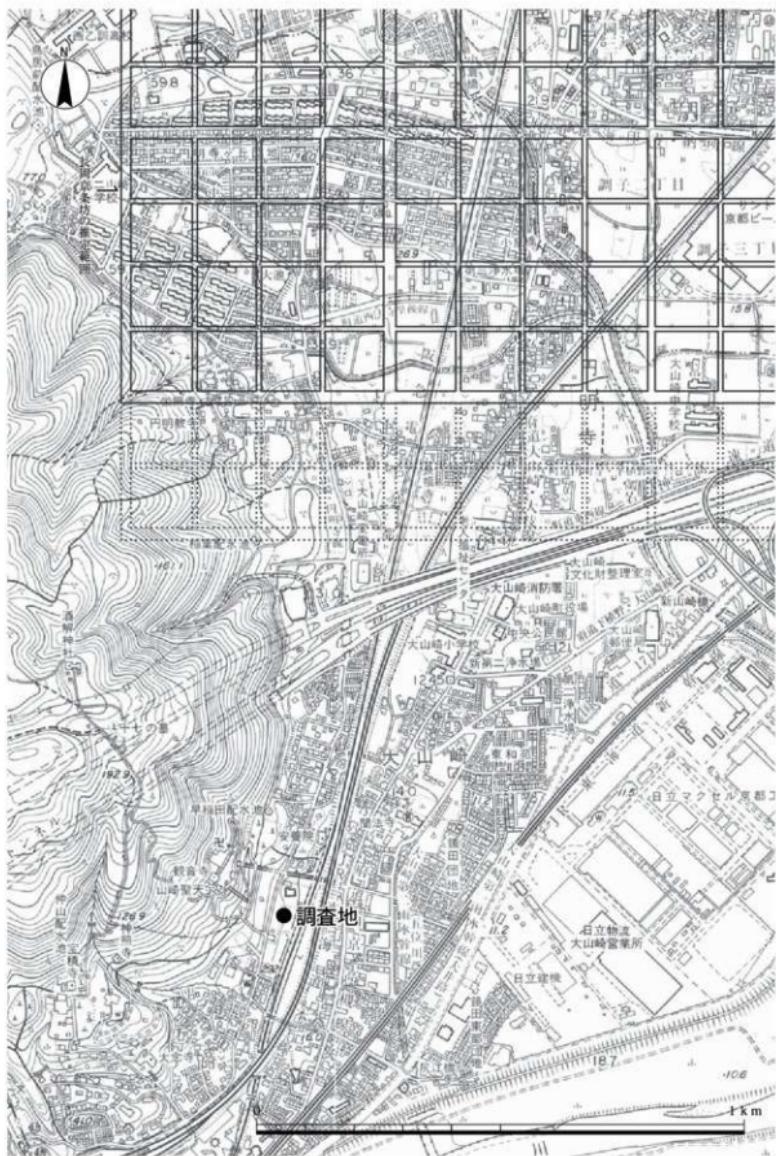
北半部における窯の配置は、焚口を東に開く一群（7・8号窯）（以下C群瓦窯とする）を検出した。C群瓦窯は2基の窯を検出した。これらは約6mの間隔で配置される。A群瓦窯北端の6号窯とC群瓦窯南端の7号窯は、約48mの間隔がある。A群瓦窯の焚口のラインはC群瓦窯の焚口のラインとほぼ一致する。また、A群瓦窯の前庭部を覆う掘立柱建物のラインはC群瓦窯の前庭部を覆う掘立柱建物のラインとほぼ一致する。

今回の調査では、北半部に位置するC群瓦窯北端の8号窯の北側において窯の存在やその他の遺構の分布を把握する目的で3か所（北から第1調査区、第2調査区、第3調査区）の調査区を設けて調査を行った。

第1調査区は、史跡大山崎瓦窯跡の北隣接地の北端に当たり、7号窯・8号窯の焚口列の北延長部で調査区を設定した。当該箇所は、凹み状を呈し、土採りがなされた状況を示していた。7号窯・8号窯の間隔を規則的に延長させて瓦窯の存在を推定すると、調査区の南北壁断面が前庭部推定位置に当たる。調査面積は、25.3m<sup>2</sup>である。

第2調査区は、7号窯・8号窯の焚口列の南北位置から東へ20mの地点に当たる。東側一帯の遺構の範囲を確認するために設定した。調査面積は、10.4m<sup>2</sup>である。

第3調査区は、8号窯の北側における窯の存在を確認するために、IK65次調査区の北側に隣接して調査区を設定した。調査面積は、48.0m<sup>2</sup>である。



第1図 調査地位置図 (1/10,000)



## 遺跡名

1 脇山遺跡	9 圓明寺跡	14 山崎橋跡	22 堀尻遺跡	32 白味才遺跡
2 烏居前古墳	11 榎示の木古墳	15 山崎城跡	23 松田遺跡	33 古城遺跡
3 小倉古墳	12 白味才古墳	16 銭原遺跡	24 宮脇遺跡	34 白味才西古墳
4 石倉集石遺跡	13 大山崎遺跡群	17 山崎遺跡	25 下植野南遺跡	35 烏居前西遺跡
5 境野古墳群	河陽離宮跡	18 長岡京跡	26 算用田遺跡	36 山崎麻寺(山崎院跡)
6 葛原親王塚遺跡	相応寺跡	19 山崎津跡	27 烏居前遺跡	
7 葛原親王屋敷跡遺跡	山城國府跡	20 百々遺跡	30 金藏遺跡	
8 里の後古墳	山崎駅跡	21 久保川遺跡	31 西法寺遺跡	

遺跡の番号は、京都府教育委員会2004年発行『京都府遺跡地図』〔第3版〕に準じたため欠番が存在する。

第2図 遺跡地図 (1/20,000)

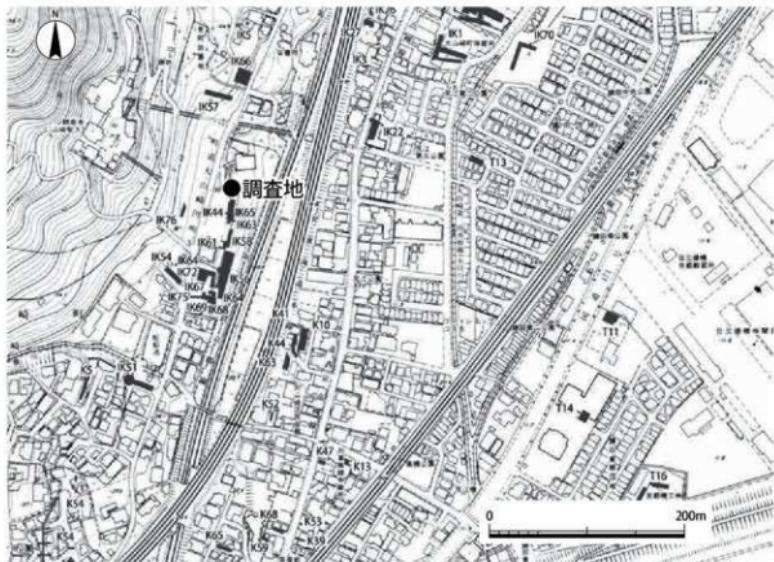
## 第2節 調査の経過

調査の経過は、下記の通りである。

- 2月21日～ 第1調査区、第2調査区の掘削をする。
- 3月16日 第1調査区、第2調査区の調査を終了する。
- 4月10日～ 第3調査区の人力で掘削を開始する。
- 4月24日 第3調査区の石段状造構SX02の写真撮影をする。
- 4月27日 第3調査区の土坑SX01の上面を検出する。写真撮影をする。
- 4月28日～ 第3調査区の土坑SX01の断面を掘削する。
- 5月23、24日 第3調査区の全景写真を撮影する。
- 5月26日～ 図面作成、現地説明会の準備をする。
- 6月14日 記者発表を行う。
- 6月17日 現地説明会を開催する。当日は天候  
にも恵まれ、約150人の来場者があった。
- 6月19日～ 第3調査区の図面の作成を行う。人力、  
重機による調査区の埋め戻しを行う。
- 7月4日 調査を終了する。

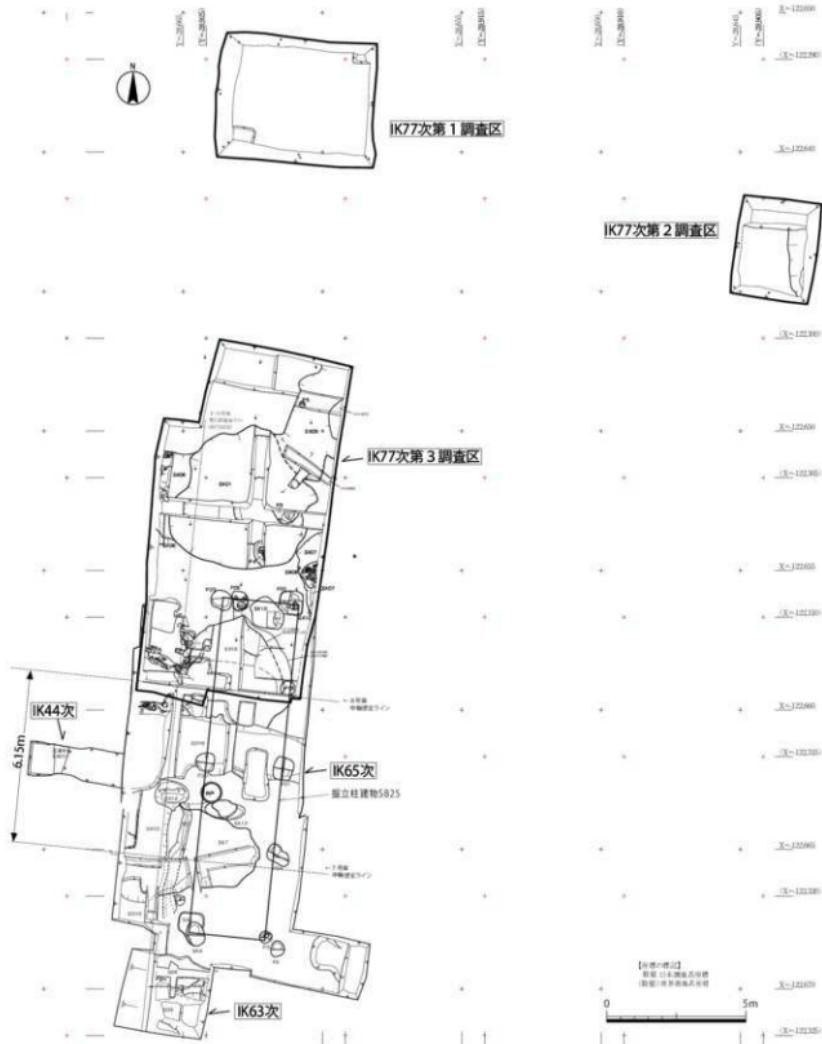


写真1 現地説明会風景





第4図 調査区配置図 (1/600)



第5図 調査区配置図 (1/175)

## 第2章 基本層序と検出遺構

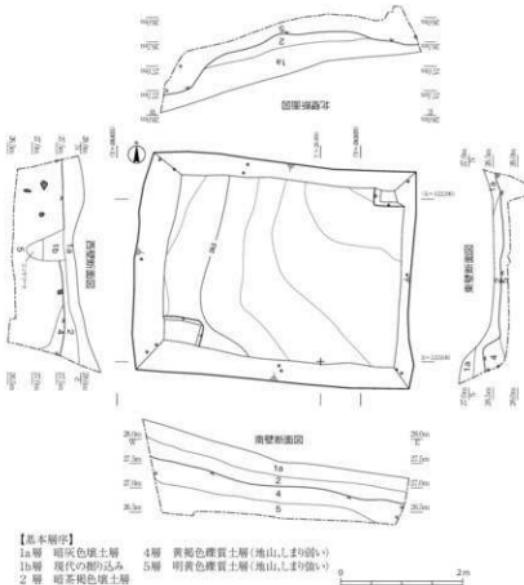
### 第1節 第1調査区

#### 1 基本層序

基本層序は、当該調査の南側で実施されたIK65次調査に準じ、1層～5層に区分される。1層は暗灰の土壤層で表土にある。2層は暗茶褐色系の壤土層である。3層に相当する黄褐色系の壤土層は、当該調査区では存在しない。4層・5層は、段丘層でいわゆる地山に相当する。4層は黄褐色漂質土、5層は明黄色漂質土である。しまりは、前者が弱く、後者は固い。4層は、部分的にしか存在しない。

#### 2 遺構面

遺構面は、2層上面および4層・5層上面である。当該調査区では、地山面を検出したのみで、遺構は検出されなかった。4層は南壁では遺存しているが、北壁に向かって削平されている状況が見られる。調査区は南側から北側に向かって当初から凹んでおり、北側は後世に削平された状況がうかがえる。



第6図 第1調査区平面図・断面図 (1/100)

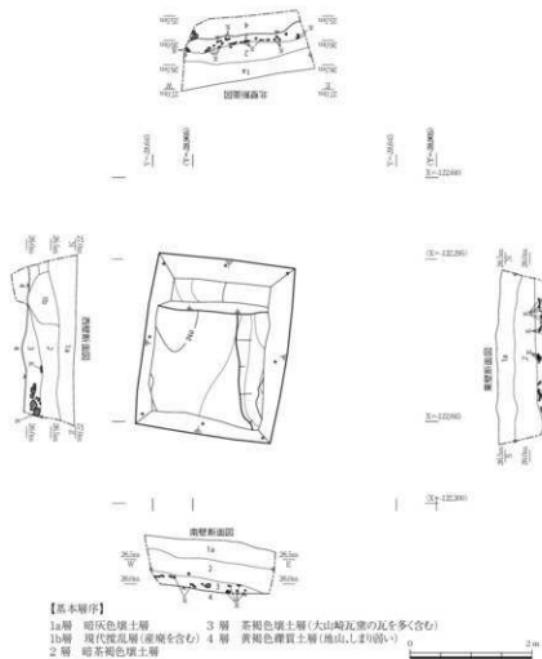
## 第2節 第2調査区

### 1 基本層序

基本層序は、当該調査の南西側で実施されたIK65次調査に準じ、1層～4層に区分される。1層は、暗灰色の壤土層で表土にあたる。2層は暗茶褐色の壤土層である。3層は茶褐色の壤土層で、遺構面直上の遺物包含層に当たる。大山崎瓦窯関係の瓦片を多く含んでいる。4層は、段丘層でいわゆる地山に相当する。黄褐色の礫質土層である。しまりはやや弱い。

### 2 遺構面

遺構面は、4層上面にあたる。遺構面の上位には、ほぼ一面に瓦片と壤土が約20cm堆積している（3層）。遺構面は、東に向けて約5°～9°の勾配で傾斜している。調査区の東端では、約20cmほど落ち込む肩状の斜面を検出している。遺構面を明確に掘り込む遺構は確認できなかった。



第7図 第2調査区平面図・断面図 (1/100)

## 第3節 第3調査区

### 1 基本層序

基本層序は、当該調査の南側で実施されたIK65次調査に準じ、基本層序は、1層～4層に分けられる。1層は暗灰の土壤層で表土にある。2a層は、暗茶褐色系の壤土層である。2a層上面から石段状遺構SX02が検出された。2a層上面を第1遺構面とする。2b層は、暗黄褐色のシルト層である。1層と2層からは、古代の瓦と近世の遺物が出土する。古代の瓦は、大山崎瓦窯に関する遺物であり、近世の遺物は大山崎瓦窯以降の土地利用を示す。（註1）3層に相当する黄褐色系の壤土層は、当該調査区では存在しない。4層は、段丘層でいわゆる地山に相当する。黄茶褐色の礫混じりのシルト層である。4層上面で8号窯や土坑SX01など、大山崎瓦窯に関する遺構を検出した。4層上面を第2遺構面とする。

### 2 検出遺構

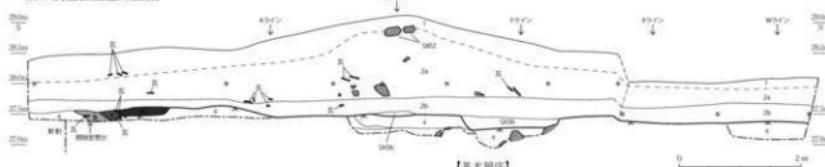
〔第1遺構面〕 石段状遺構SX02を検出した。時期は石段状遺構SX02周辺の出土遺物から近世に比定される。

石段状遺構SX02 10石の石を階段状に並べたものである。この石段状遺構SX02周辺には後述する瓦や土器がまとまって出土した。足場の硬化の可能性も考えられる。

〔第2遺構面〕 8号窯や土坑SX01など大山崎瓦窯に関する遺構を検出した。時期は平安時代であり、平安京編年I新（810～840年）～II古（840～870年）期（註2）に比定される。

土坑SX01 8号窯中軸から約6m北に土坑SX01の中軸がとおる。直径約5mの円形を呈する。深さは70cmを測る。土坑底は地山であり、焼けた痕跡は一切見られない。そのため、焼成を伴う構造物は存在しないことを確認した。土坑底の地山直上から焼け損じた瓦や窯材（瓦窯の構築材。焼け損じた瓦と比べ、硬く焼きしまっている。また、瓦の周囲に粘土が焼きしまったものが付着する個体もある。）、角礫（以下、焼け損じた瓦、窯材、角礫を廃材と呼ぶ。）が堆積する。のことから、廃材

第3調査区西壁断面図

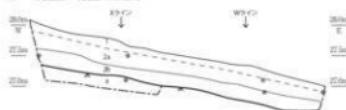


【基本層序】  
1層 暗灰土壤土層  
2a層 暗茶褐色系壤土層(石・瓦を含む)  
2b層 暗黃褐色シルト層  
4層 黄茶褐色礫混じりシルト層(地山)

【遺構埋土】  
SX06暗黃褐色シルト層(土部を含む)

【凡例】  
■ a 明赤褐色シルト層 窯業時の埋土、瓦、地土  
■ b 明赤色シルト層 廃材と強く接觸した粘土を多量に含む  
■ c 明赤色シルト層 廃材を少量含む  
■ d 明黄色シルト層 地山由来の土

第3調査区北壁断面図



第8図 第3調査区壁断面図 (1/80)

を廃棄した廃棄土坑と考えられる。土坑底に土の堆積がみられないことから、土坑掘削直後に廃材が廃棄されたことがわかる。廃材は、土坑内に隙間なく堆積する。また、下層に大きめの瓦、上層に小片の廃材が堆積する傾向にある。これらの点から、廃材は一気に廃棄されたことがわかる。廃材の堆積の方向が一定ではないことから、投入方向は不明である。

**不明遺構SX09** 深さ20cm、幅1.8mである。土坑SX01との切りあいではなく、同時に堆積したものと考えられる。埋土には焼け損じた瓦、窯材、角礫を多量に含み、土坑SX01と同じ様相を呈する。遺構の性格は不明である。今後の調査によって、調査区北側に遺構の延長が確認できれば溝と評価される可能性がある。

**不明遺構SX06** 断面の切りあい関係から、土坑SX01の下位にある。埋土からは、少量の瓦片と土器片が出土する。遺構の平面形は、調査区の西側が未調査のため不明である。

**土坑SX07** 深さ35cm、調査区東壁の南北幅3.0mである。

**土坑SX08** 深さ20cm、調査区東壁の南北幅95cmである。切りあい関係から、土坑SK07の上位にある。埋土からは多量の窯材が出土した。焼き損じ瓦の出土はほとんどなく、窯材を中心廃棄した土坑である。

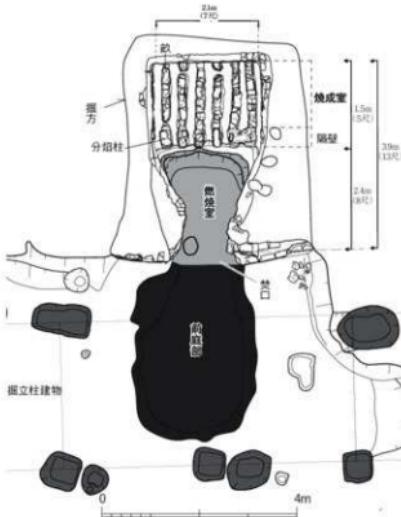
**ピットP3** 深さ20cm以上、幅91cmである。切りあい関係から、土坑SX01の下位にある。埋土には、焼土や炭化物を含む。焼き損じた瓦に混じり、完形に近い土師器や須恵器が出土したことが特徴である。なお、土坑SX01とピットP3の埋土の土質はともにシルトである。そのため遺構の境界が曖昧であった。炭化物と焼土が混じる埋土をピットP3の埋土と判断して遺物の取り上げを行った。

**ピットP4** 深さ25cm、幅84cmである。切りあい関係から、土坑SX01の下位にある。

埋土には、焼土や炭化物を含む。断面には、完形に近いと想定される瓦を確認した。

**8号窯** IK65次調査で8号窯の前部から燃焼室にかけてを検出した。今回の調査では、IK65次調査で検出した範囲の北半部を再調査した。今回の調査で、窯の掘方ラインを認識した。5号窯の調査では、袖の瓦積みの位置で燃焼室から1.3mに掘方を検出した（第9図）。8号窯の掘方ラインは、袖部分の瓦積みの形に添って掘られている可能性が考えられる。

燃焼室は瓦積みを行い、その内側に塗られた粘土は火をうけて硬く焼き締り、灰色を呈している（b層）。瓦積みの外側約20cmは埋土が明赤色を呈している（c層）。埋土に焼



第9図 瓦窯各部名称図（下図：5号窯）(1/100)

き締った灰色の粘土や瓦が含まれる可能性も想定される。ただし、現状ではb層とc層の境目が不明瞭である。堀方埋土に窯材を含むかどうかは、調査区を西側に広げ燃焼室が全面調査できる段階で判断したい。c層より外側は明黄色のシルトであり、地山由来の土であると考えられる。

焚口には支柱石が遺存する。高さ約50cm、幅約20cmを測る。縱長に据え置かれる。支柱石より外側の袖部には瓦積みを施す。支柱石より約20cm外側にかけてc層が分布する。c層分布範囲の袖部の瓦積みは小口面が露出する。c層より外側にはd層が分布する。d層分布範囲の袖部の瓦積みは側面が露出する。また、袖部に使用される瓦のうち1枚は、凸面の繩タキを小口面と平行に施す個体である。

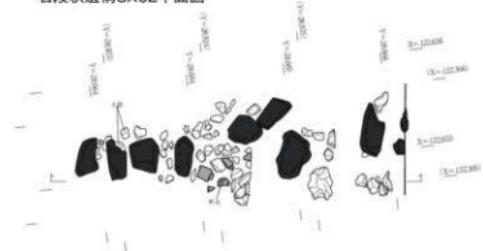
前庭部は船底状の掘り込みがある。炭と焼土が互層に堆積する様子がうかがえる。IK65次調査時に掘り込みの上端を検出している。今回その外側にも炭の分布が広がる様子を確認したため図示した。

**ピットP19、ピットP22、ピットP23、ピットP26** 前庭部の掘建柱建物の柱穴である。IK65次調査で検出したものを再調査した。ピットP22は、隅丸方形になることを確認した。一边が約85cm、深さ45cmである。中心より南東側に主柱穴が確認できる。直径約20cmである。埋土には炭化物を含む。ピットP23は、円形である。直径約70cm、深さ約50cmである。埋土からは、瓦（OY207 報告番号51など）が出土した。ピットP26は、円形である。直径50cm、深さ20cmである。中心より南側に主柱穴が位置する。ピットP23のすぐ東側に位置する。切りあい関係から、ピットP23に対してピットP26が先行することがわかる。ピット

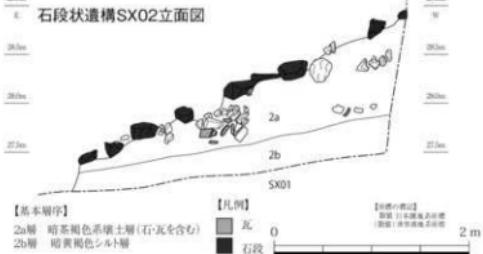
P23はピットP26の建て替えの可能性も考えられる。

**土坑SX15** 幅約120cm、深さ20cmの不整形な隅丸方形である。埋土には炭化物を含む。窯材が出土した。

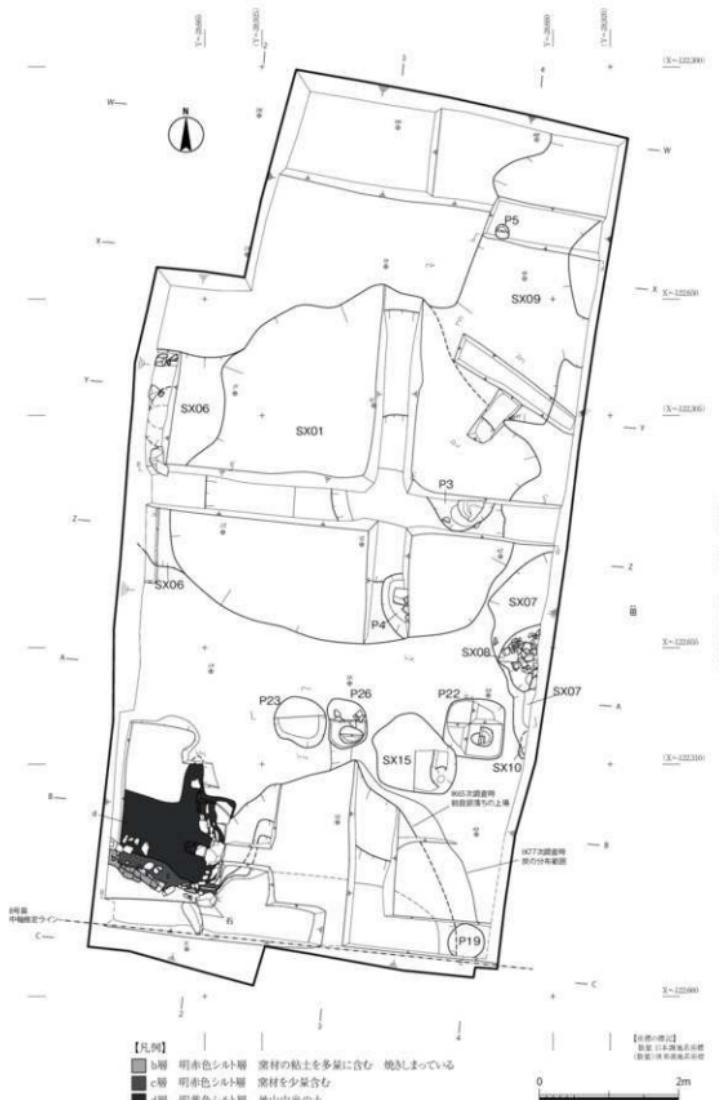
石段状遺構SX02平面図



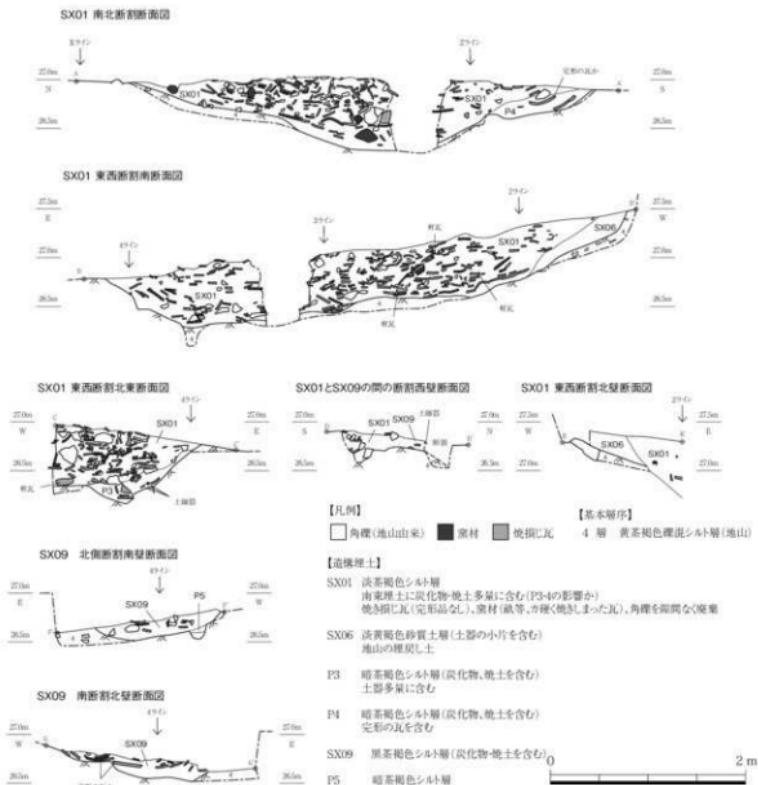
石段状遺構SX02立面図



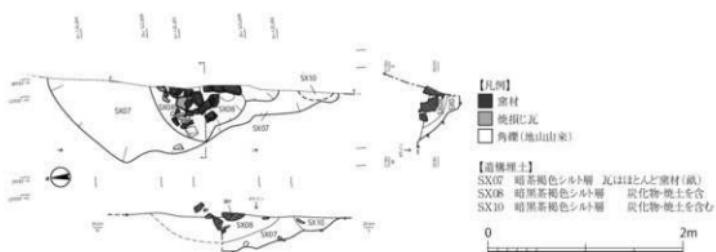
第10図 石段状遺構 SX02 平面図・断面図 (1/50)



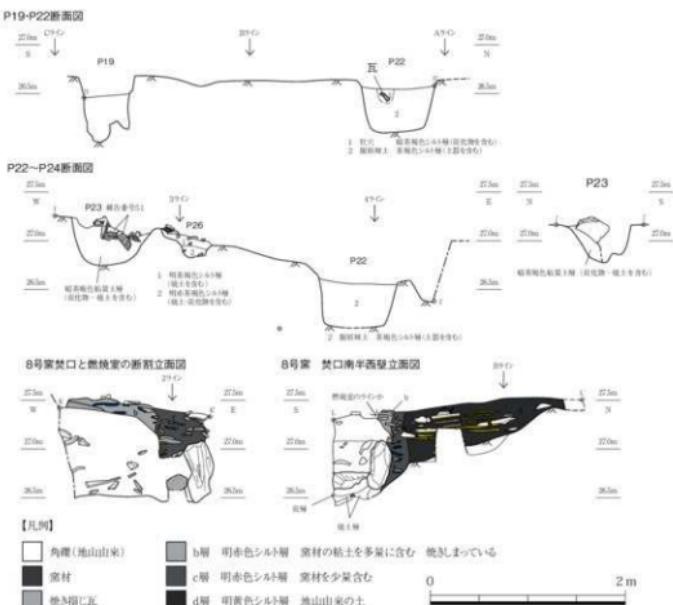
第11図 第3調査区平面図 (1/70)



第12図 土坑 SX01 断面図 (1/50)



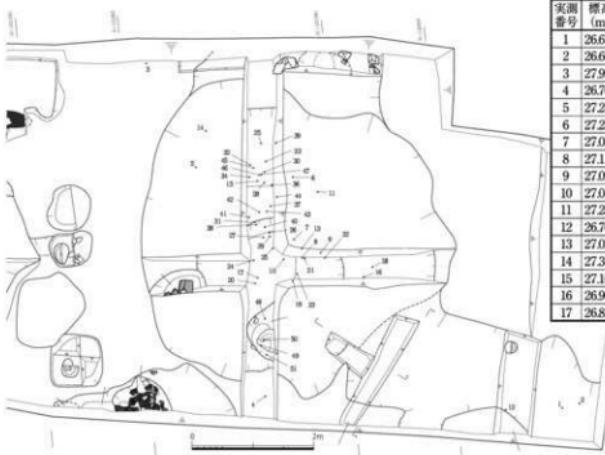
第13図 土坑 SX07、土坑 SX08、土坑 SX10 平面図、断面図 (1/50)



第14図 8号窯関係遺構断面図 (1/50)

表1 遺物取り上げ位置の標高

実測番号	標高(m)	実測番号	標高(m)	実測番号	標高(m)
1	26.679	18	26.886	35	26.935
2	26.665	19	26.522	36	26.835
3	27.998	20	26.479	37	26.910
4	26.760	21	26.500	38	26.610
5	27.247	22	26.466	39	26.930
6	27.230	23	26.346	40	26.523
7	27.085	24	26.620	41	26.608
8	27.114	25	26.743	42	26.670
9	27.096	26	26.765	43	26.718
10	27.042	27	26.645	44	26.769
11	27.280	28	26.969	45	26.766
12	26.765	29	26.810	46	26.682
13	27.025	30	26.960	47	26.657
14	27.349	31	26.899	48	26.490
15	27.165	32	26.902	49	26.484
16	26.900	33	26.802	50	26.260
17	26.835	34	26.840	51	26.304



第15図 遺物取り上げ位置 (1/80)

## 第3章 出土遺物

### 第1節 はじめに

第3調査区では、平安時代の遺物（大山崎瓦窯跡に関する遺物）と中世から近世の遺物が出土した。古代の土器は、平安京編年I新（810～840年）～II古期（840～870年）（註2）に比定される。古代の遺物は、土師器、須恵器、綠釉陶器、瓦、壇が出土した。中でも、土坑SX01は十字に断割を設定し、遺構の形状を確認するにとどまったが、軒瓦が63点、丸瓦と平瓦が約1,110kg出土した。以下では、平安時代の遺物と中世から近世の遺物にわけて報告する。平安時代の遺物は、土器、鉄器は出土遺構ごとに記述し、瓦、壇は出土遺構に関わらず軒瓦、丸瓦、平瓦、壇の順に報告する。包含層からの遺物の取り上げには、2mごとのグリットを使用した。

### 第2節 平安時代の土器、鉄器

〔ピットP3出土土器〕 ピットP3からは土師器、黒色土器、須恵器が出土した。

土師器は、皿（1～3）、甕（4～6）がある。1は、外面調整ユビオサエの痕跡がはつきりと見てとれる。胎土は、赤橙色を呈する。2は、口縁部が外反した後、やや内湾する。底部は厚さ約5mmとやや分厚い。3は、口縁部が外反した後、やや内湾し端部を巻き込んで終わる。外面調整は、ナデ、ユビオサエである。甕は、体部が丸い形態（4、5）と胴長の形態（6）に分けられる。4は、外面調整ヨコナデ、内面調整ナデ、ユビオサエである。河内産の甕の可能性がある。5は、外面調整板タタキ、ナデ、ハケ、内面調整ナデ、ハケ、ユビオサエである。6は、外面調整ナデ、ハケ、内面調整ナデ、ハケ、ユビオサエである。

黒色土器は、皿（7）がある。内面にミガキを施す。

須恵器は、杯B（8、9）がある。いずれも高台の取り付く位置は、屈曲部とほぼ同じ位置である。8は、内面にススの痕跡と墨痕のような痕跡が見られる。このことから灯明の容器としての使用がうかがえる。9は、高台内面及び高台上に線刻が見られる。

〔土坑SX01出土土器、鉄器〕 土坑SX01からは、土師器、黒色土器、綠釉陶器、鉄器が出土した。

土師器は、皿（10、11）、椀（12）、甕（13）がある。皿（10、11）は、縁部は外反した後、やや内湾し端部をやや巻き込んで終わる。外面調整にはケズリを施す。甕（13）は、外面調整ユビナデ、内面調整ナデを施す。報告番号4の甕と調整と器形が類似する。河内産の甕の可能性がある。

黒色土器は、椀（14）がある。内面は黒色でミガキを施す。

須恵器は、椀（15）、壺（16、17）、鉢（18）がある。

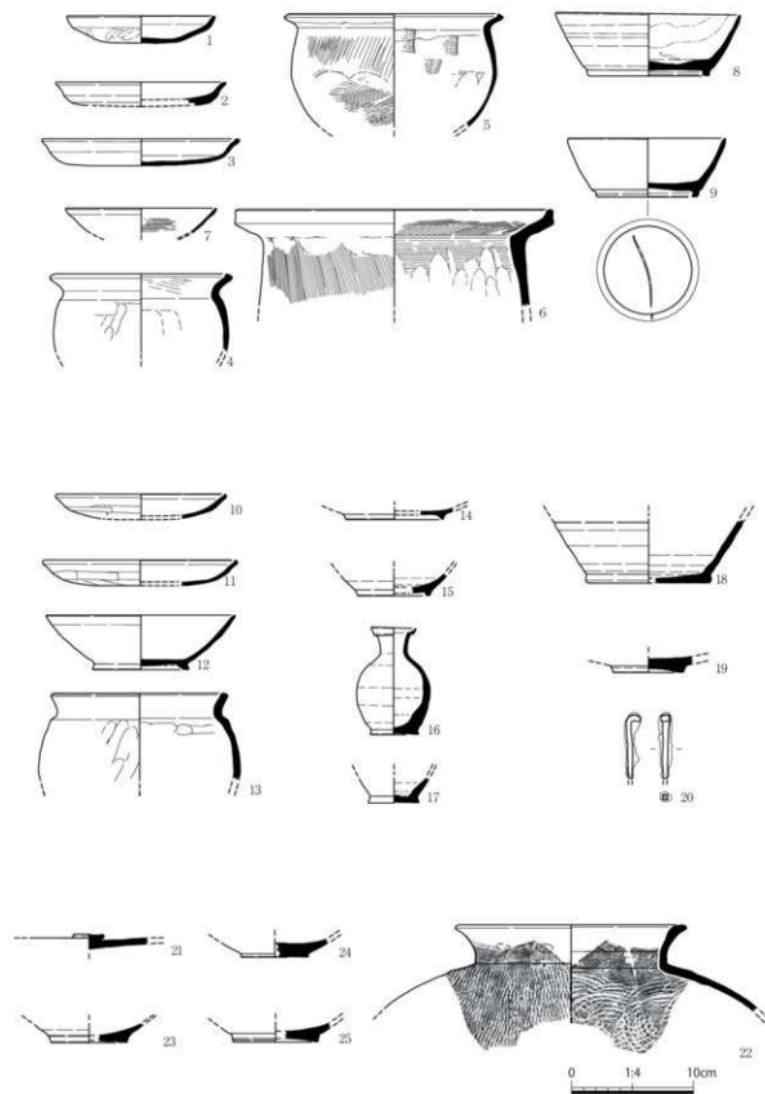
綠釉陶器は、椀（19）がある。綠釉素地である。高台は、削り出し高台である。

鉄器は、鉄釘（20）がある。頂部がほぼ直角に7mm曲がる。断面形は方形を呈する。

〔その他〕 その他遺構に伴う物ではないが、固化に耐えうる土器を図示する。

須恵器は、蓋（21）、甕（22）がある。蓋は第1調査区の表採資料である。

綠釉陶器は、椀（23～25）がある。高台は削り出し高台である。25は綠釉素地である。



第16図 平安時代の土器、鉄器

### 第3節 平安時代の瓦類

軒瓦は、13型式の軒丸瓦（第23図）と8型式の軒平瓦（第24図）が出土している。また、西賀茂瓦窯、吉志部瓦窯、栗柄野瓦窯との需給関係を第25図にまとめた。以下では型式・種を省略する。このうち軒丸瓦では、OY111、OY112が今回初めて出土した型式である。軒平瓦では、OY208が今回初めて出土した型式である。丸瓦は、玉縁の遺存状況が良好で特徴のあるものを4点図示した。平瓦は、完形に近い個体1点と凸面の縄タタキを小口面と平行に施す個体1点を図示した。埠は、3面が依存し、法量の計測が可能な個体を図示した。

**〔軒丸瓦〕** 今回の調査では、OY102が3点（26~28）、OY104が1点（29）、OY106が3点（30~32）、OY107が1点（33）、OY111が1点（34）、OY112が1点（35）、型式不明が2点の合計12点が出土した。このうちOY111とOY112は新たに出土した型式である。

OY107（33）は、複弁12弁である。中房は平滑で、蓮弁との間には凸線が回る。蓮弁は、中央部が盛上がる。内区と外区の間には、一条の凸線が回る。

OY111（34）は、複弁11弁である。中房はレンズ状を呈し蓮弁との間に凸線が回る。珠文は7個ある。蓮弁に盛上がりではなく、平滑である。内区と外区の間には、一条の凸線が回る。平安宮豊楽院出土瓦（伊藤・小檜山1996 報告番号2）と同范であることを確認した。

OY112（35）は、小型瓦である。直径約10.0cmであり、OY108型式とほぼ同じ大きさである。單弁であり、子葉が見られる。蓮弁の弁端は表出されない。内区と外区の間には、一条あるいは二条の凸線が回る。

**〔軒平瓦〕** 今回の調査では、OY204aが4点、OY204bが6点、OY204が8点、OY205aが1点、OY205bが5点、OY205が22点、OY206が11点、OY207が1点（註3）、OY208が1点、型式不明が12点の合計71点が出土した。OY208は新たに出土した型式である。

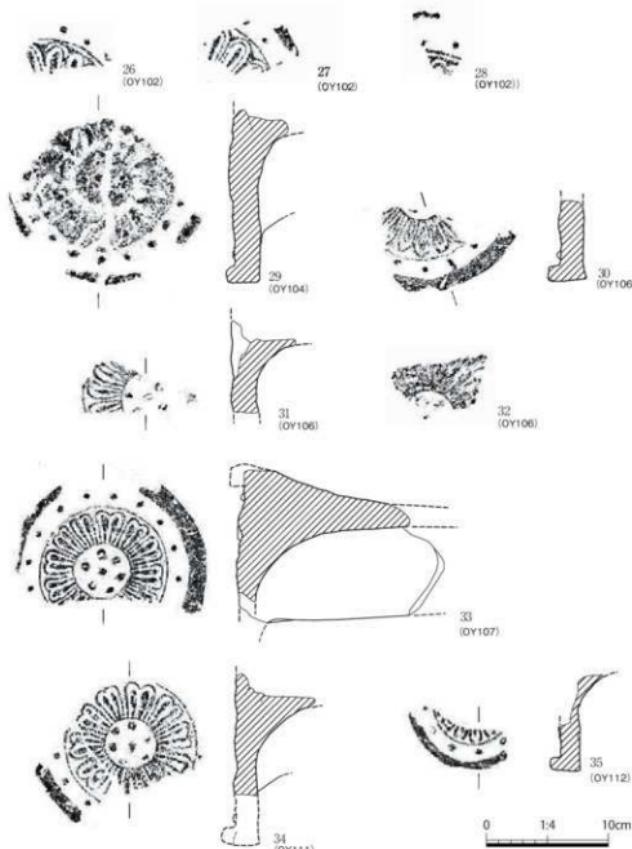
OY204は、OY204a（36~38）、OY204b（39、40）、OY204（41）の6個体を掲載する。OY204aは、中心飾に縱棒を刻む以前の段階である。36は、上外区右から2番目の珠文の下方に範傷が見られる。OY204bは、中心飾に縱棒を刻む以後の段階である。40は、上外区右から1番目の珠文の上方に範傷がある。このことから、OY204bであると判断した。OY204の範傷の進行段階については、後述の第4章第5項の第28図を参照されたい。41は、左脇区中央の珠文の右側に範傷がある。この範傷は進行しているが、OY204aの段階にあたるかOY204bの段階にあたるかを判断することはできない。

OY205は、OY205a（42、43）、OY205b（44~46）、OY205（47）の6個体を掲載する。OY205aは、下外区に「西」銘を刻む以前の段階である。42は、上外区右から2番目の珠文の下方と右脇区中央の珠文の下方に範傷が見られる。43は、左脇区中央の珠文に範傷が見られない。OY205aの中で左脇区中央の珠文に範傷が見られる個体が存在することから、43はOY205aと判断される。OY205の範傷の進行段階については、後述の第4章第5項の第29図を参照されたい。OY205bは、下外区に「西」銘を刻む以降の段階である。46は、上外区左から1番目の珠文の上方に範傷が見られる。47は、左脇区中央と下部の珠文に範傷が見られる。左脇区下部の珠文の範傷はOY204aの段階でつくかOY204bの段階でつくか判断できる個体の出土がない。

OY206は、48~50の3点を掲載する。50は、唐草文が角ばった形をしている。文様の彫り直しが行われた可能性がある。

OY207は、51の1点が出土した。IK56次調査で出土した個体（大山崎町教委2010 報告番号1）と接合関係にある（註3）。今回の出土によって、瓦当文様が完形となった。平瓦部凸面は縄目タタキ、ユビナデ、平瓦部凹面は糸切り、布目、ユビナデの痕跡がある。

OY208は、52の1点が出土した。今回の調査で新たに出土した型式である。中心飾は対向C字形



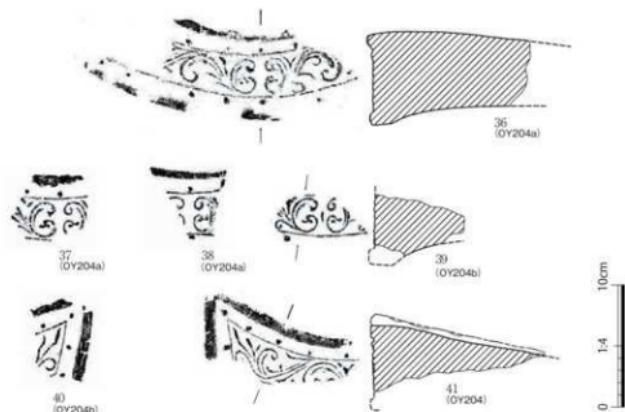
第17図 軒丸瓦

である。内区は均等唐草文様である。第3単位の主葉が第1単位や第2単位の主葉に対して直線的である。左脇区中央の珠文から上外区左の1番目と2番目の珠文の間にかけて、上外区左から2番目の珠文、中心飾中央、上外区右から2番目の珠文、第2単位の主葉に范傷がある。頸の形態は、曲線頸である。平安宮中和院出土瓦（平田1979 報告番号4）と同范である。中心飾中央の范傷は、平安宮中和院出土瓦が進行している。

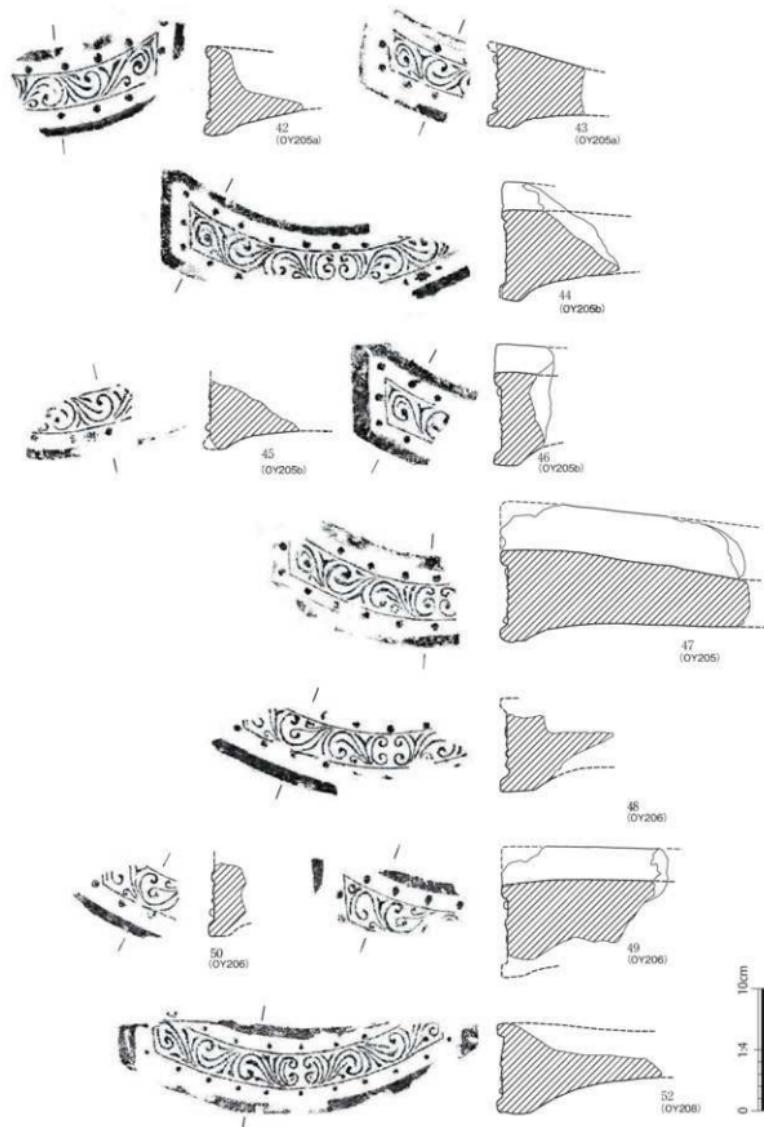
〔丸瓦〕 53～56の4点を掲載する。53は、丸瓦部は幅11.0cm、玉縁端部の幅は6.9cm、玉縁の長さは5.6cmである。54は、丸瓦部は幅15.9cm、玉縁端部の幅は8.85cm、玉縁の長さは6.4cmである。55は、玉縁端部の幅は9.2cm、玉縁の長さは7.2cmである。56は、玉縁端部の幅は12.1cm、玉縁の長さは8.2cmである。53は、小型の丸瓦である。54～56は大型の丸瓦である。

〔平瓦〕 57は完形に近い平瓦である。長辺33.7cm、短辺22.0cm以上である。凹面には糸切りの痕跡がうかがえる。58は凸面の繩叩きを小口面と平行に施す。これと同様の叩きの方向を示す瓦が第3調査区で合計3点出土した。また、8号窓の構築材としても小口に対し平行に繩叩きを施す瓦が使用されている。

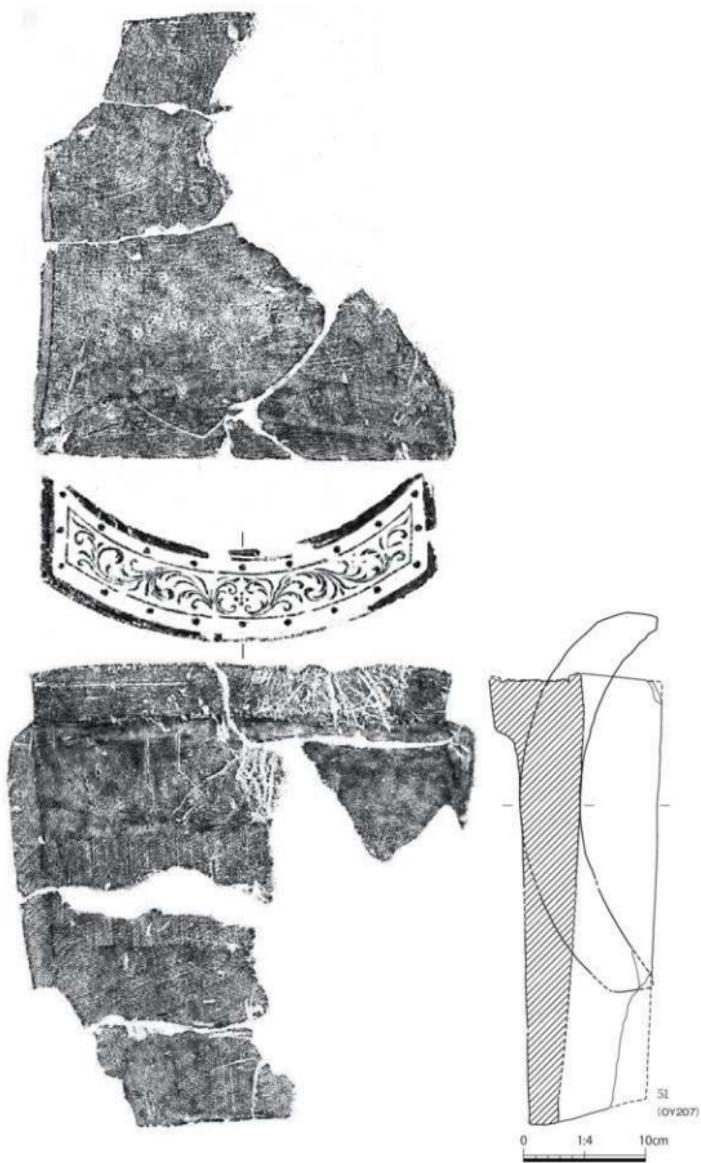
〔埠〕 59～62の4個体を掲載した。59は、幅15.2cm、厚さ16.0cm以上である。60は、幅15.3cm、厚さ6.4cmである。61は、幅15.3cm、厚さ7.1cmである。62は、幅15.8cm、厚さ7.0cmである。59～61は幅がほぼ15.3cmであるため、同一の型を使用したと考えられる。62は、幅15.8cmと少し大きいため異なった型を使用した可能性が考えられる。少なくとも2個以上の型の存在が想定される。厚さに関しては、6.4cm～7.1cmと厳密には統一が見られない。その他、IK65次調査でも埠の出土が報告されている（大山崎町教委 報告番号3）。両端面が残存していないため、幅は不明である。厚さは6.6cmであり、今回出土した埠の数値の範疇に含まれる。



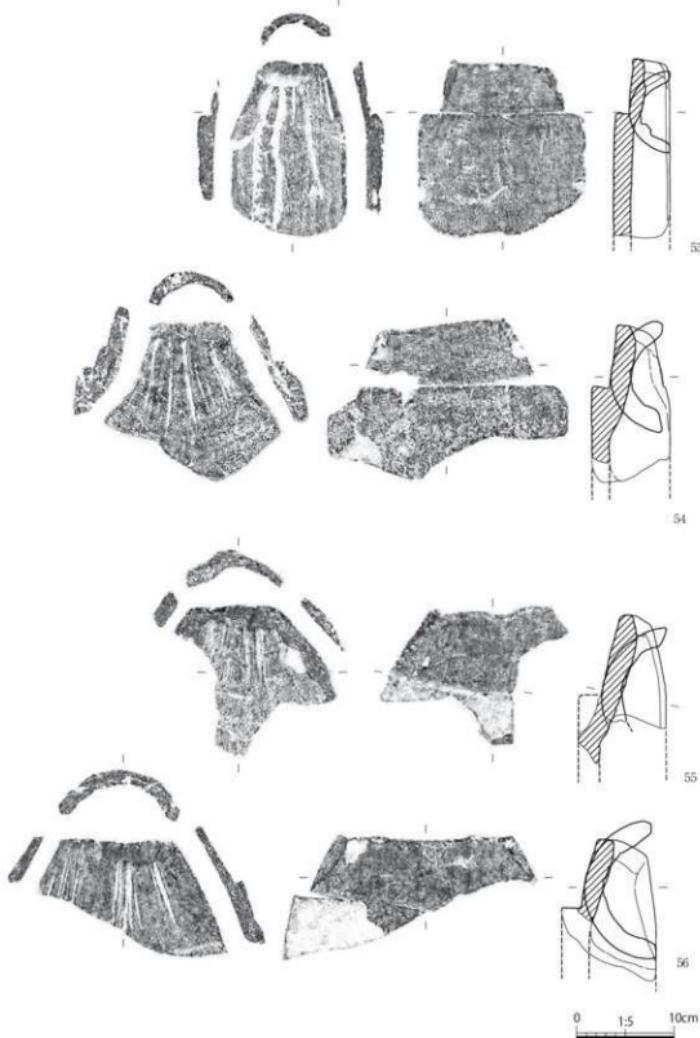
第18図 軒平瓦（1）



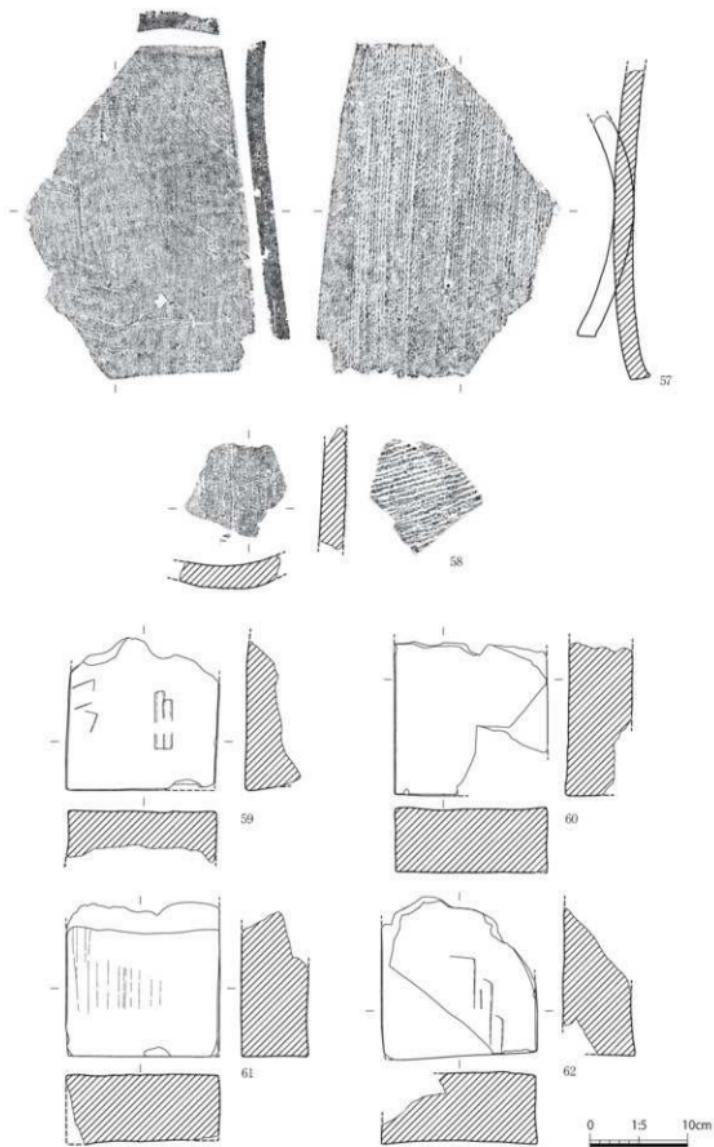
第19図 軒平瓦（2）



第20図 軒平瓦（3）



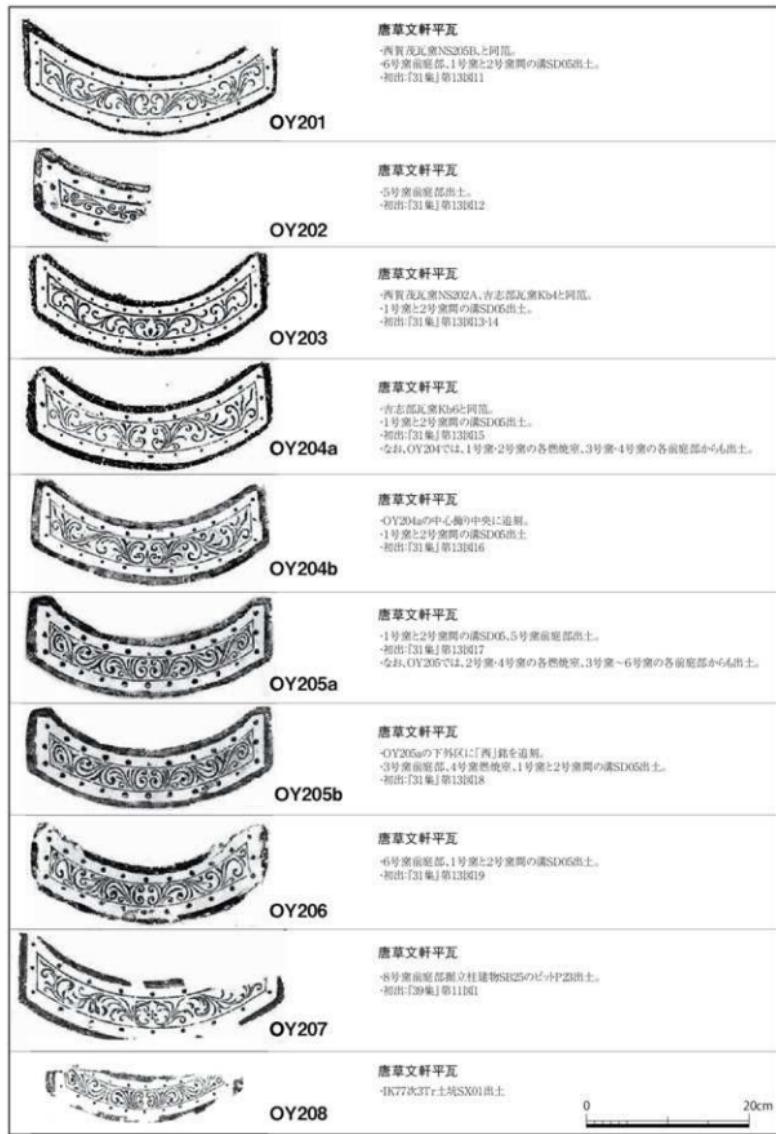
第21図 丸瓦



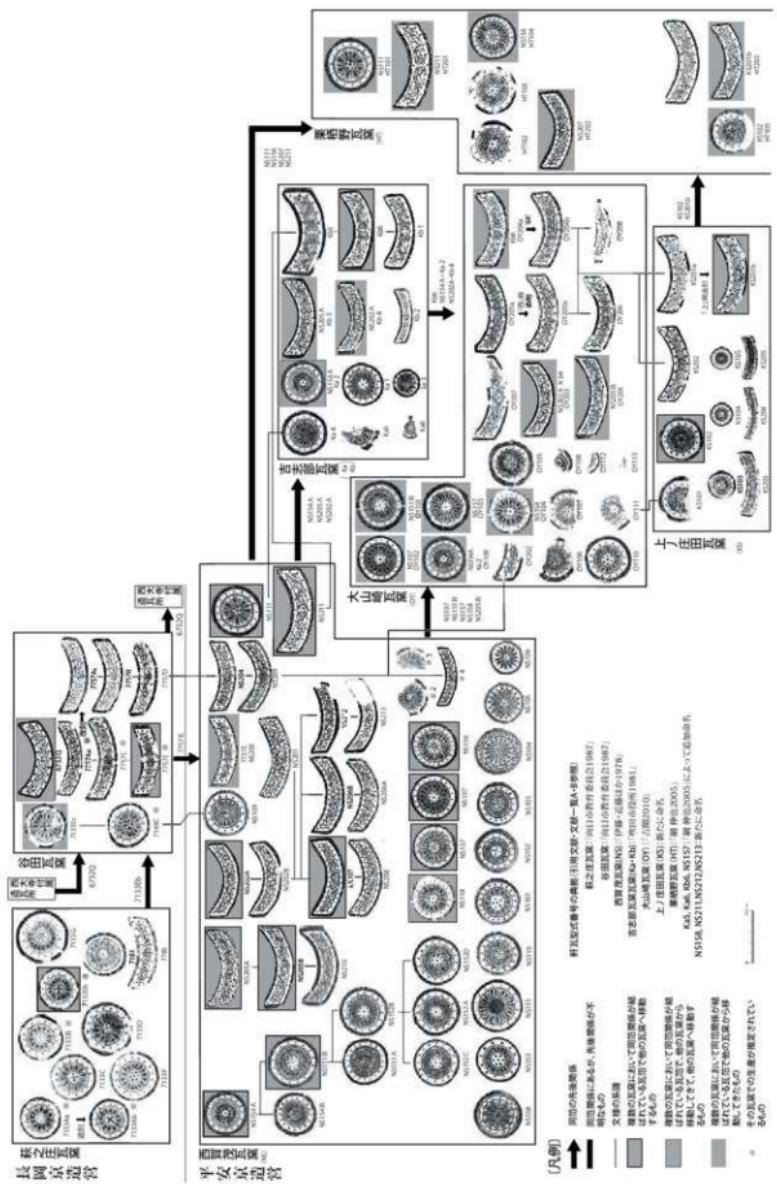
第22図 平瓦、埠

 <p><b>複弁8弁蓮華文軒丸瓦</b> -西賀茂瓦窯NS151Bと同瓦。 -1号窯の壁材、7号窯周辺より出土。 -初出「31集」第12861-2</p> <p>OY101</p>	 <p><b>単弁16弁蓮華文軒丸瓦</b> -西賀茂瓦窯NS101と同瓦。 -1号窯の壁材、2号窯西側で表探し。 -初出「31集」第12863</p> <p>OY102</p>
 <p><b>複弁9弁単弁2弁蓮華文軒丸瓦</b> -西賀茂瓦窯NS157と同瓦。 -5号窯前部出土。 -4号窯6号窯の各前部出土。 -初出「31集」第13855</p> <p>OY103</p>	 <p><b>複弁6弁単弁4弁蓮華文軒丸瓦</b> -6号窯前部出土。 -初出「31集」第13864 -平安京の出土例には、 西賀茂瓦窯産に想定される出土例有り</p> <p>OY104</p>
 <p><b>複弁11弁蓮華文軒丸瓦</b> -1号窯と2号窯間の溝SD05出土。 -初出「31集」第13866</p> <p>OY105</p>	 <p><b>単弁16弁蓮華文軒丸瓦</b> -4号窯と5号窯の各前部。 -1号窯と2号窯間の溝SD05出土。 -初出「31集」第13889</p> <p>OY106</p>
 <p><b>複弁12弁蓮華文軒丸瓦</b> -1号窯と2号窯間の溝SD05出土。 -初出「31集」第1387</p> <p>OY107</p>	 <p><b>蓮華文軒丸瓦</b> -5号窯前部出土。 -初出「31集」第13810</p> <p>OY108</p>
 <p><b>複弁8弁蓮華文軒丸瓦</b> -西賀茂瓦窯NS154A。 -吉志郡瓦窯Ka2同瓦。 -7号窯西側の溝SK9出土。 -初出「38集」第6683</p> <p>OY109</p>	 <p><b>複弁8弁蓮華文軒丸瓦</b> -7号窯-8号窯上位の瓦面より出土。 -初出「31集」第12781</p> <p>OY110</p>
 <p><b>複弁11弁蓮華文軒丸瓦</b> -IK77k3Tr不明道標SX09出土</p> <p>OY111</p>	 <p><b>蓮華文軒丸瓦</b> -IK77k3TrM3出土</p> <p>OY112</p>
 <p><b>複弁11弁蓮華文軒丸瓦</b> -IK77k3Tr土坑SX01出土</p> <p>OY113</p>	

第23図 大山崎瓦窯出土軒丸瓦の型式一覧



第24図 大山崎瓦窯出土軒平瓦の型式一覧



第25図 長岡京・平安京における造宮官司系瓦窯の展開（古岡 2017 に加筆）

## 第4節 中世から近世の遺物

1層、2層及び階段状遺構SX02周辺から出土した。土師器、須恵器、陶器、瓦、銭貨がある。

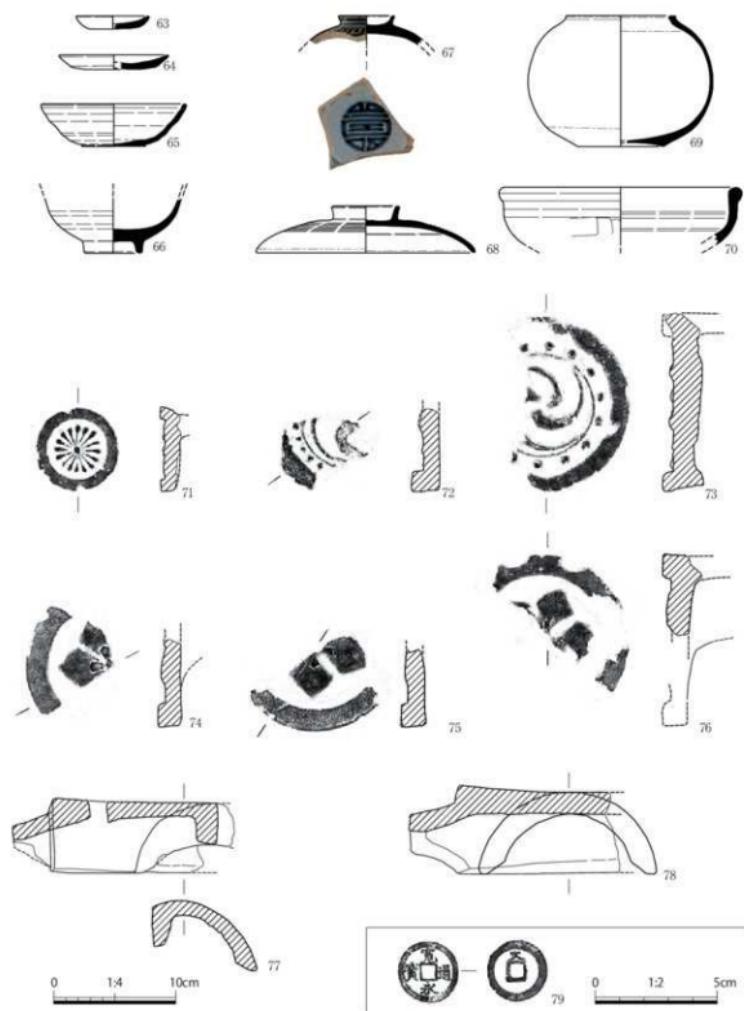
土師器は、皿（63、64）がある。全体的に分厚く整形され、口縁部の立ち上がりも弱い。平安京編年XIV中期頃（1850年頃）に比定される。

須恵器は椀（65）がある。高台は整形されるが、内面の凹みは見られない。第Ⅱ期第1段階（12世紀中頃～後半）（森田1995）に比定される。

陶器は椀（66）、蓋（67、68）、土瓶（69）、鉢（70）がある。66は、内外全面に青灰色の釉薬がかかる。67は、内外全面の素地に白色の釉薬がかかる。濃青色の釉薬で外面に放射状の線、内面に円形の文様を描く。68は、内外全面に黄緑色の釉薬がかかる。ツマミから端部にかけての中央に8本の沈線を同心円状に施す。69は、底部から1.5cmは素焼きであり、それより上位に赤茶褐色の釉薬がかかる。70は、焼締陶器である。

瓦は、軒丸瓦（71～76）、丸瓦（77、78）がある。71は小型の軒丸瓦である。菊の文様を施す。72、73は巴文の軒丸瓦である。73は、珠文帯の幅は1.1cm、内区は8.1cmを測る。巴頭部と尾の境界が曖昧となっている。おおよそ近世に比定される。74～76は桐の花の文様を施す軒丸瓦である。現在の觀音寺の建物の軒丸瓦は桐の花の文様を施す。77は、玉縁の長さが2.5cmである。丸瓦部の中央やや玉縁よりに直径1.5cmの孔を施す。また、丸瓦部端部の片側が3.2cm折り曲げられている。屋根の配置場所は不明であるが、道具瓦である。78は、玉縁の長さが3.7cmである。整形方法は、77と類似する。

銭貨は寛永通宝（79）がある。第2層から出土した。表面は「寛永通宝」、裏面は「文」の文字がみえる。文字ははっきりと読め、遺存状態は良好である。



第26図 中世～近世の土器、瓦、錢貨

## 第4章 まとめ

### 第1節 調査成果の概要

7号窯と8号窯の間隔に基づいて、規則的に北側に窯が存在したと仮定すると、8号窯と第1調査区との間には、3基の窯の存在が見込めた。この仮定では、当該調査区の南壁が前庭部推定位置に当たっている。南壁断面が示すところによれば、調査区の南に隣接する前庭部の存在は、想定しがたいという所見が得られた。北壁断面は、2層の直下に5層が存在する。このことから、調査区の北側にかけては削平を受けていると考えられる。

第2調査区は、瓦窯群の南北の焚口列から東に20mの地点に位置している。今回の調査で検出された遺構面上位の瓦の堆積は、瓦窯廃絶時の堆積を示すとみられる。このことから、当該調査区周辺でも瓦窯に関係する遺構の存在が想定できる。

第3調査区は、2面の遺構面を確認した。第1遺構面からは、近世に比定される階段状遺構SX02を検出した。当地は現在も桜の広場公園から調査区へ降りるスロープとなっている。また、階段状遺構SX02の直上から出土した軒丸瓦の文様が現在の観音寺の建物に葺かれている軒丸瓦の文様と同じである。観音寺に関わる通路としての使用が、近世までさかのほる可能性が考えられる。

第2遺構面からは、8号窯や土坑SX01など大山崎瓦窯に関する遺構を検出した。土坑SX01の中軸は、8号窯の中軸より北へ約6mに位置する。つまり、8号窯より北へ6m延長させたライン上には瓦窯が存在しないことを確認した。第3調査区は、8号窯より約12m北まで設定したが、窯の痕跡は検出されなかった。また、IK63次調査では7号窯から南へ約6mの地点まで調査区を設定した（大山崎町教委2009）。中世の遺構によって古代の遺構面が削平を受けていたが、窯の痕跡を示す遺構は確認できなかった。このことから、7号窯から南へ約6m延長させたラインにも瓦窯の存在は想定しがたい。これらの調査成果から、C群瓦窯は7号窯と8号窯の2基で構成されていると考えられ、南半部のA群瓦窯やB群瓦窯が5基で構成されることとは、異なる様相を示す。

土坑SX01からは焼き損じた瓦や窯材が大量に出土した。この性格は廃棄土坑と考えられる。立地から、C群瓦窯で焼成した瓦の焼き損じ瓦やC群瓦窯の窯材を廃棄したと考えられる。出土した軒瓦は次節で検討する通り、大山崎瓦窯の窯の構築順序を考える契機を与えた。また、窯材の出土は7号窯から8号窯の改修を示している。ピットP3は土坑SX01の下位に位置する遺構である。土師器や須恵器といった土器がまとまって出土した。土坑SX01とピットP3から出土した軒瓦や土器から、土器と軒瓦の両者から大山崎瓦窯の操業時期を検討することが可能となった。

### 第2節 大山崎瓦窯の窯の構築順序

#### 1 はじめに

今回の調査で検出した土坑SX01とピットP3は、大山崎瓦窯の窯の構築順序を検討する契機を与えた。ここでは、窯の配置、瓦窯の構造、出土土器、出土軒瓦の4つの観点から大山崎瓦窯の窯の構築順序について検討を行う。

## 2 窯の配置について

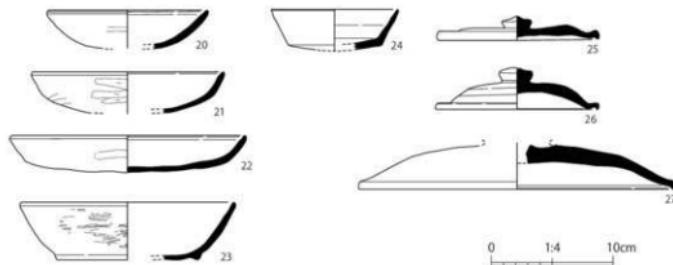
南半部の焚口が東に開口するA群瓦窯と焚口が南に開口するB群瓦窯ではそれぞれ5基の窯を検出した。北半部の焚口が東に開口するC群瓦窯は2基の窯を検出した。A群瓦窯北端の6号窯とC群瓦窯南端の7号窯は、約48mの間隔がある。A群瓦窯の焚口のラインはC群瓦窯の焚口のラインとほぼ一致する。また、A群瓦窯の前庭部を覆う掘立柱建物のラインはC群瓦窯の前庭部を覆う掘立柱建物のラインとほぼ一致する。このため窯の数は異なるが、南半部と北半部を一帯とした計画的な瓦窯の配置が考えられる。

## 3 瓦窯の構造について

隔壁下部に位置する分焰柱は、筒状の粘土の周間に平瓦を3枚縦置く構築方法と平瓦複数枚を横置きにする構築方法がある。前者は、大山崎瓦窯、奈良山瓦窯の五陵池東瓦窯・歌姫瓦窯で見られる。後者は大山崎瓦窯、西賀茂瓦窯、吉志部瓦窯で見られる。のことから、相対的に前者は古相を示し、後者は新相を示す。IK56次調査（大山崎町教委2005）、IK68次調査、IK69次調査、IK75次調査では南半部のA群瓦窯、B群瓦窯の調査を行った。そのうち焼成室の調査を行ったのは、1号窯、2号窯、4号窯、5号窯、9号窯、10号窯、11号窯である。2号窯と4号窯（A群瓦窯）は筒状の粘土の周間に平瓦を3枚縦置く構築方法である。1号窯、9号窯、10号窯（B群瓦窯）と5号窯（A群瓦窯）は平瓦を複数枚横置きする構築方法である。5号窯は、焼成室の床面が他の窯に比べて30cm高く構築されている。のことから燃焼室の改修が想定され、5号窯の分焰柱も変更された可能性が想定される。分焰柱の新古関係からA群瓦窯が古相を示し、B群瓦窯が新相を示す。

## 4 出土土器について

IK56次調査で検出した溝状遺構SD08、IK77次調査で検出した土坑SX01とピットP3からまとまって土器が出土した。溝状遺構SD08は、6号窯（A群瓦窯）の前庭部南側に位置する。土器は、前庭部の灰の搔き出し層の下位から出土した。のことから6号窯の操業時に廃棄された遺物と考えられる。A群瓦窯は5基の同時操業が考えられるため、溝状遺構SD08から出土した土器はA群瓦窯の操業時期の一点を反映していると考えられる。土器は碗A1点、杯A1点、皿A1点、杯B1点、須恵器は杯A1点、杯B蓋3点が出土した（第27図）。土器の外面調整は、ケズリを施すc手法が用い



第27図 IK56次調査溝状遺構 SD08出土土器（大山崎町教委2005）

られる。また、口縁部は外反したまま立ち上がる。平安京土器編年Ⅰ中（780～810年）～Ⅰ新（810～840年）段階に比定される（大山崎町教委2005）。

土坑SX01とピットP3から出土した土器は（「第3章第2節」を参照）、土器の外面調整はe手法とc手法が混在する。また、口縁部は外反した後に内湾し、端部を巻き込んで終わる個体もある。平安京編年Ⅰ新～Ⅱ古段階（810～870年）に比定される。これらのことから、溝状遺構SD08と土坑SX01・ピットP3の出土土器を比較すると、前者の方が古相を呈し後者の方が新相を呈する。つまり、A群瓦窯は古相を示し、C群瓦窯は新相を示すと考えられる。

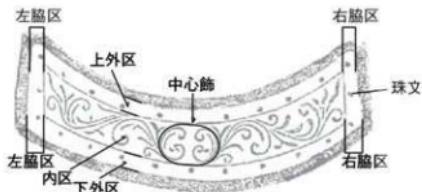
## 5 出土軒瓦について

### （1）OY204とOY205の范傷について

軒瓦の范傷の有無や進行度合いを見ることによって、軒瓦の製作順序を考えることができる。OY204とOY205は大山崎瓦窯において范に追刻を施す型式である。この追刻の前後関係と范傷の先後関係を整理することによって追刻部位が欠損した個体で追刻との前後関係が把握できる。OY204は、中心飾の中央に縱棒の追刻がみられる。追刻前の個体をOY204a、追刻後の個体をOY204bとする。OY205型式は、下外区右から2番目と三番目の珠文の間に「西」銘の追刻がみられる。追刻前の個体をOY205a、追刻後の個体をOY205bとする。それぞれの范傷の進行状況と追刻の関係について第29図と第30図にまとめた。范傷の場所はアから順にカタカナで表記し、図と本文を対応させた。

OY204は、吉志部瓦窯出土Kb6と同范である。范傷の進行状況からOY204よりKb6が先行する。つまり、吉志部瓦窯から大山崎瓦窯へ范が移動したことを示している。1段階を吉志部瓦窯出土Kb6とし、2～4段階を大山崎瓦窯出土OY204とする。1段階で確実に見られる范傷は、右脇区の珠文（ア、イ、ウ）と上外区左から3番目の珠文（エ）である。2段階は大山崎瓦窯に范が移動した段階である。Kb6の范傷に加え、上外区右から2番目の珠文（オ）と左脇区中央の珠文（カ）に范傷が見られる。ただし今後、吉志部瓦窯でオあるいはカの位置に范傷が生じる個体が確認される可能性はある。上外区右から4番目と5番目の珠文の間に「×」印のスタンプが押印される個体も出土している。3段階は、中心飾の中央に縱棒を追刻した段階である。3段階以降の個体をOY204bとする。4段階は、大山崎瓦窯出土瓦の現段階の認識でもっとも范傷が進んだ状態を図示した。上外区右から1番目の珠文（キ）と左脇区下の珠文（ク）に范傷が見られる。このため、上外区右から1番目の珠文（キ）と左脇区下の珠文（ク）に范傷が見られる個体はOY204 bと判断できる。また、右脇区中央の珠文（イ）は1段階と比べて、上外区右から2番目の珠文（オ）と左脇区中央の珠文（カ）は2段階と比べて范傷の進行がみられる。

OY205は、他の瓦窯での出土がない大山崎瓦窯の独自范である。1段階～3段階を設定する。1段階は、右脇区上の珠



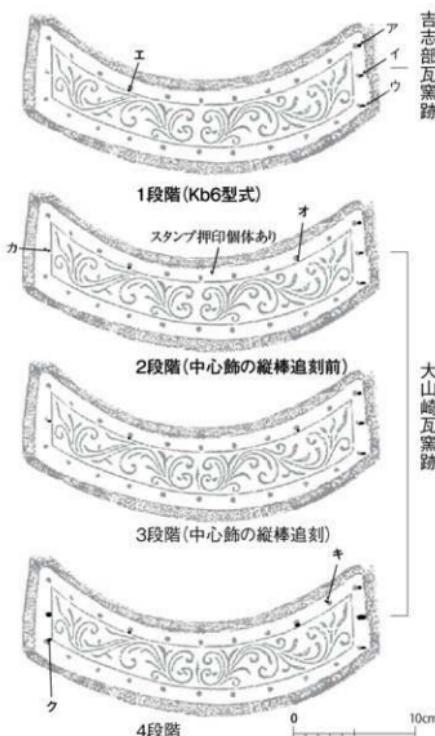
第28図 軒平瓦各部名称図

文（ア）、右脇区中央の珠文（イ）、下外区右から2番目の珠文（ウ）、下外区中央の珠文（エ）、左外区中央の珠文（オ）に范傷が見られる。2段階は、下外区右から2番目と3番目の珠文の間に「西」銘を刻んだ段階である。この段階以降の個体をOY205bとする。3段階は、現時点で大山崎瓦窯から出土した中でもっとも范傷が進行した状態を図示した。上外区右から1番目の珠文（カ）、下外区右から3番目の珠文（キ）、下外区左から3番目の珠文（ク）、下外区左から2番目の珠文（ケ）、上外区左から1番目の珠文（コ）、左脇区下の珠文（サ）に范傷が生じる。なお、今後OY205aで左脇区下の珠文（サ）の位置に范傷が生じる個体が出土する可能性も考えられる。このため、上外区右から1番目の珠文（カ）、下外区右から3番目の珠文（キ）、下外区左から3番目の珠文（ク）、下外区左から2番目の珠文（ケ）、上外区左から1番目の珠文（コ）のいずれかに范傷がみられる個体はOY205bと考えられる。また、瓦当全面に木目の范傷が進行している個体もある。なお、下外区右から2番目の珠文（ク）に范傷があるが「西」銘がない個体がある。「西」銘を埋めた痕跡はなく、ナデ消した可能性もある。現状では1点のみの出土であるため、今後の資料の出土を待ちたい。

#### （2）出土瓦の構成

大山崎瓦窯で出土した軒瓦の出土遺構について表2にまとめた。中でも一括資料としてまとまって軒瓦が出土した遺構には、IK56次調査の溝SD05、IK72次調査の土坑SX10、IK77次調査の土坑SX01がある。これらの軒瓦の構成を比較することによって遺構の性格について考えたい。

溝SD05は、B群瓦窯の焚口のラインとほぼ平行し、B群瓦窯の焼成室奥壁から背後約4.5mに位置する排水溝である。軒丸瓦10点、軒平瓦50点が出土した。軒丸瓦は、OY101の1点が西賀茂瓦窯から移動した范であるほかは、OY105、OY106、OY107といった大山崎瓦窯の独自范の瓦である。また、軒平瓦は、OY203、OY204、OY205が多数を占める。OY204はOY204bが多数を占める。同様に、OY205についてもOY205bが多数を占める。また、軒丸



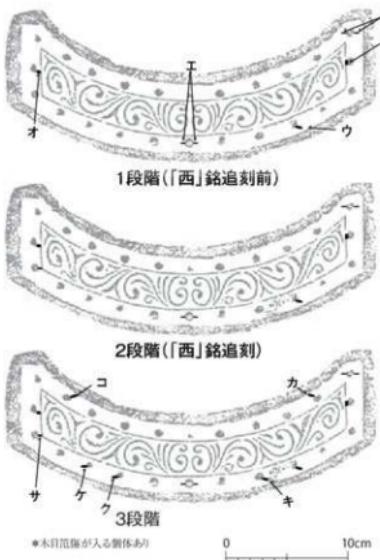
第29図 OY204の范傷進行段階

瓦に比べて軒平瓦の出土量が多い。溝SD05から出土した瓦は、A群瓦窯・B群瓦窯で焼き損じた瓦がA群瓦窯・B群瓦窯の廃絶時に廃棄されたものと位置付けられる。

土坑SX10は、A群瓦窯とB群瓦窯の背後に位置する廃棄土坑である。軒丸瓦27点、軒平瓦4点が出土した。軒丸瓦はOY101、OY102である。これらは、いずれも西賀茂瓦窯から移動した範である。軒平瓦はOY207のみである。OY207は対向C字形の中心飾を有する唐草文の粗型の瓦の型式変化から平安時代初期の瓦の中で古相に位置付けられている（古閑2017）。また、軒平瓦に比べ軒丸瓦の出土量が多い。土坑SX10は、A群瓦窯とB群瓦窯の背後に位置することから、A群瓦窯とB群瓦窯からの焼き損じ品を廃棄した土坑と考えられる。土坑SX10の軒丸瓦と軒平瓦は、型式のまとまりが強い。また、いずれの軒瓦も古い段階の型式を示すため、比較的初期の焼き損じ瓦を廃棄した土坑と考えられる。

土坑SX01は、C群瓦窯の北側に位置する。軒丸瓦8点、軒平瓦56点が出土した。軒丸瓦は、OY102の1点、OY104の1点が西賀茂瓦窯から移動した範であるほかは、OY106、OY107、OY111といった大山崎瓦窯の独自範の瓦である。また、軒平瓦は、OY204、OY205、OY206、OY208の出土がある。OY204はOY204bが多数を占める。同様に、OY205についてもOY205bが多数を占める。また、軒丸瓦に比べて軒平瓦の出土量が多い。土坑SX01は、C群瓦窯の焼き損じ瓦を廃棄した土坑と考えられる。

以上から、土坑SX10からは西賀茂瓦窯との同範瓦や型式学的に比較的古い段階の型式を示す軒瓦が出土した。このことから、A群瓦窯とB群瓦窯は比較的古い段階の型式を示す軒瓦を焼いていたことがうかがえる。溝SD05と土坑SX01からは、大山崎瓦窯の独自範の型式が多く出土した。OY204とOY205の範傷を比較しても溝SD05から出土した軒平瓦と土坑SX01から出土した軒平瓦の間には先後関係がうかがえない。これらのことから、大山崎瓦窯の新相段階では、A群瓦窯とB群瓦窯とC群瓦窯が同時期に操業していたことがうかがえる。また、土坑SX01からは大山崎瓦窯の独自範の軒瓦が多く出土し、西賀茂瓦窯と同範瓦が少ない。このことから、C群瓦窯はA群瓦窯とB群瓦窯に後出する瓦窯である可能性が考えられる。今後、C群瓦窯周辺を調査することによって、土坑SX01以外の廃



第30図 OY205の範傷進行段階

窯土坑の有無とその軒瓦の型式について注目する必要がある。

## 6　まとめ

これまで窯の配置、瓦窯の構造、出土土器、出土軒瓦の4つの観点を検討した。窯の配置からは、南半部のA群瓦窯・B群瓦窯と北半部のC群瓦窯が計画的に配置されていると言える。一方、A群瓦窯とB群瓦窯が5基で構成されているのに対し、C群瓦窯は2基で構成されているという相違点があげられる。瓦窯の構造として分焰柱に着目するとA群瓦窯が古相の構築方法であり、B群瓦窯が新相の構築方法であるといえる。出土土器を比較すると、A群瓦窯の操業時期の一点を示す溝状遺構SD08が古相の土器型式、C群瓦窯の操業時期の一点を示す土坑SX01とピットP3が新相の土器型式である。出土軒瓦として、A群瓦窯とB群瓦窯の操業時期の一点を示す土坑SX10、A群瓦窯とB群瓦窯の操業時期の一点を示す溝SD05、C群瓦窯の操業時期の一点を示す土坑SX01を比較した。その結果、土坑SX10が古相を示し、溝SD05と土坑SX01はほぼ同時期の瓦の型式であり新相を示す。これらの現象が示すことは、A群瓦窯が先行して操業した後にB群瓦窯が成立した。その後C群瓦窯が追加され、12基の瓦窯で瓦生産を行っていたことが想定される。

## 第3節　おわりに

史跡大山崎瓦窯跡の北側隣接地での調査は、これまで瓦窯の存在の確認に主眼がおかれて調査区を設定してきた。今回の調査によって、窯の周辺の土地利用の一部を明らかにした。第2調査区の調査成果から、東側にも遺構の広がりが想定される。第3調査区の調査成果から、窯の周辺にも重要な遺構が広がることが明らかとなった。今後は窯の周辺の土地利用のあり方を明らかにすることによって、瓦生産の導線を検討したい。また、大山崎瓦窯の中での土地利用の変遷についても明らかにしていきたい。

表2 型式別出土地

区分		南半部(史跡指定範囲)						北半部(史跡北側隣接地)											
調査次数	型式	IK56次 (31集)			IK67次 (31集)			IK69次 (31集)			IK72次 (38集)			IK75次 (38集)			小計	IK77次	小計
同種陶器 品目	先 後	1号 窯	2号 窯	3号 窯	4号 窯	5号 窯	6号 窯	7号 窯	8号 窯	9号 窯	10号 窯	11号 窯	12号 窯	13号 窯	14号 窯	15号 窯	合 計	8号窯以北 点 数	
瓦	大山 崎瓦窯 が後出 る。	N515B	OY101	1	1			1	1	19	1						2	26	
		NS107	OY102	3					1	1	8	1					1	4	18
		NS157	OY103			1						14					0	0	1
		NS158	OY104			1						1					1	2	3
		OY105				4					2		7		1		1	8	
		OY106				1	1	4					7				3	3	10
		OY107				2					2					1	1	3	
		OY108				1					1					0	0	1	
軒瓦	瓦	NS154A	OY109							0							1	1	
		Ka2	OY110							0							1	1	
		OY111								0							1	2	2
		OY112								0							1	1	1
		OY113								1		1					0	0	1
		(不明)	5	2	0	0	0	1	0	1	4	9	4	0	1	2	3	1	12
		NS206B	OY201							31	3	1	0	1	65	1	2	5	2
		OY202									2						0	0	2
		NS202A	OY203								1						0	0	5
		Kb4									5								
		Kb6	OY204	1	2	1	1	1	9	1						1	1	7	28
		Kb6	OY204a					1									4	4	5
		Kb6追	OY204b					10	1								6	7	18
平瓦		OY205	2	1	2	1	1	1	6	2	1					2	20	27	46
		OY206a				2					2					1	2	4	
		OY206b	1	2		6					9		1			1	4	6	15
		OY207			1	1				1	5	1	7			1	10	11	13
		OY208								0						2	1	1	1
		(不明)	0	1	4	3	4	2	1	2	4	4	1	0	1	5	3	2	19
		合計点数	5	3	4	3	3	1	3	8	51	8	1	1	3	36	3	1	18
															4	10	5	2	254

【註】

- 註1 基本層序はIK65次調査に準じる認識で調査を開始した。この段階では1層及び2a層を1層と認識し、2b層を2層と認識して遺物の取り上げを行った。現況の桜の広場公園から調査地に降りるスロープを調査区内の畦としてIK65次調査時の1層、2層の掘削を行った。4層上面で土坑SX01の上面を検出した段階でスロープの掘り下げを行った。スロープの掘り下げの過程で階段状遺構SX02を検出した。報告書作成段階でIK65次調査段階では1層としていた層序が分層できるとの認識にいたった。第8図の1層と2a層を区切る分層ラインは現場写真から起こし、点線標記とした。
- 註2 以下平安京土器編年には、小森1994、小森・村上1996を参照する。
- 註3 OY207は同一個体をIK65次調査で取り上げている。表2はIK65次調査として集計している。

【参考文献】

- 伊藤潔・小檜山一良1996「1 平安宮農楽院跡 1 (94HQ513)」『京都市内遺跡立会調査概報 平成7年度』京都市文化市民局
- 古閑正浩2017「平安京初期の造瓦組織」『考古学雑誌』第99巻第1号 日本考古学会
- 森俊寛1994「土師器・黒色土器・瓦器」(財)古代学協会・古代学研究所『平安京提要』角川書店
- 小森俊寛・村上憲章1996「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要』第3号(財)京都市埋蔵文化財研究所
- 平田泰1979「I 平安宮中和院跡」『平安京跡発掘調査概要』(『京都市埋蔵文化財研究所概要集』1978)京都市文化観光局、(公財)京都市埋蔵文化財研究所
- 森田稔1995「中世須恵器」中世土器研究会編『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社

【大山崎瓦窯報告書】

- 大山崎町教育委員会2005「大山崎町埋蔵文化財調査報告書」第31集
- 大山崎町教育委員会2008「大山崎町埋蔵文化財調査報告書」第36集
- 大山崎町教育委員会2009「大山崎町埋蔵文化財調査報告書」第38集
- 大山崎町教育委員会2010「大山崎町埋蔵文化財調査報告書」第39集
- \*本文中では教育委員会→教委とする。

## 付表 出土遺物観察表

[例]  
 法量は、〔 〕が復元値、( ) が残存値を示す。  
 色土は、最大粒度を示し、( ) 内には普遍的なもののうちで大形粒度を示した。  
 風物の表示は、それぞれ石英、チタート、第：黒雲母、赤：赤色風化、黒：黑色鉄として示し、  
 斧頭として量の多いもの順に記録した。  
 残存度は、單純的には、10個部の残存度を示した。

表3 土器、鉄器観察表

報告番号	実測番号	造構層位	器種	器形	法量 (cm)			色調	胎土	調整		焼成	残存度	備考
					口径	器高	底径			(内面)	(外面)			
1	96	3Tr P3	土師器	皿	12.2	2.3	-	内面：5Y8E6 稲 外面：75YR5-4 にぶい 黄 胎面：5YR6-6 稲	密 100(5) 長、石、 雲、赤	ヨコナデ、 オサエ、ナ デ	硬	K2/3		
2	109	3Tr P3	土師器	皿	[14.0]	[1.9]	-	内外面：10YR7/3 にぶ い 黄 胎面：10YR7/3 にぶい 黄 胎面：10YR7/4 にぶ い 黄 胎面：5YR6-4 にぶい 黄 胎面：10YR7/4 にぶい 黄 胎面：75YR7-4 にぶい 黄	密 30 (1.0) 長、石、 子、 黑	ヨコナデ	ヨコナデ、 オサエ	硬	K1/2	
3	51	3Tr P3	土師器	皿	16.2	2.2	-	内外面：10YR7/4 にぶ い 黄 胎面：5YR6-4 にぶい 黄 胎面：10YR7/4 にぶい 黄 胎面：10YR7/4 にぶい 黄 胎面：75YR7-4 にぶい 黄	密 35(5) 長、石、 子、 赤	ヨコナデ、 オサエ、ナ デ	硬	K3/4		
4	99	3Tr P3	土師器	甕	[15.0]	[6.4]	-	内外面：10YR7/4 にぶ い 黄 胎面：75YR6-6 稲 胎面：75YR7-4 にぶい 黄	密 30(0) 長、石、 雲、赤	ヨコナデ、 オサエ、ナ デ	ヨコナデ	硬	K1/8 外面スス 付着	
5	101	3Tr P3	土師器	甕	(18.0)	(9.3)	-	内外面：10YR7/4 にぶ い 黄 胎面：10YR7/3 にぶい 黄 胎面：10YR7/4 にぶい 黄	密 20 (0.5) 長、石、 子、 赤	ヨコナデ、 ハケ、ナ デ	ヨコナデ、 ハケ、板タ キ	硬	K1/8 内面スス 付着	
6	97	3Tr P3	土師器	甕	[26.1]	[8.0]	-	内外面：75YR6-4 にぶ い 黄 胎面：75YR6/4 にぶい 黄	密 35(0) 長、石、 子、 赤	ヨコナデ、 ハケ、オ サエ	ヨコナデ、 ハケ、ナ デ	硬	K1/4 内面スス 付着	
7	100	3Tr P3	黑色土器	皿	[12.4]	[2.2]	-	内面：10YR2/1 黒 胎面：75YR6/4 にぶい 黄 胎面：10YR4/1 破	密 0.5 (0.5) 赤、 手	ヨコナデ、 ミガキ	ヨコナデ、 ナ デ	硬	K1/4	
8	50	3Tr P3	須恵器	杯・B	14.5 ~ 15.2	5.2	100	内外面：5Y7/1 灰白 胎面：25Y7/2 灰黄	密 0.5(0.5) 長	ロクロナ デ	ロクロナデ、 貼付け高台、 高台貼付け 時のナデ、 ヘラ切りの ちナデ	硬	K1は 充 T1/1 内面スス 付着	
9	98	3Tr P3	須恵器	杯・B	13.0	4.8	83	内外面：10YR5/1 灰 胎面：25Y5/2 灰黄	密 0.5 (0.5) 長	ロクロナ デ	ロクロナデ、 貼付け高台、 ナデ、ヘラ 切りのちナ デ	硬	K1/2、 T1/1 底部外面 高台に 縦割	
10	107	3Tr SX01 東 西断削 E 区	土師器	皿	[14.0]	(2.0)	-	内外面：75YR6-4 にぶ い 黄 胎面：75YR6/4 にぶい 黄	密 1.0 (0.5) 雲、 赤、 長	ヨコナデ、 ケズリ	ヨコナデ、 ケズリ	硬	K1/4	
11	105	3Tr SX01 東 西断削 E 区	土師器	皿	[16.0]	(2.1)	-	内外面：10YR8/4 浅黄 胎面：10YR8/4 浅黄	密 1.0 (0.5) 雲、 赤、 長	ヨコナデ、 ナ デ	ヨコナデ、 ケズリ	硬	K1/4	
12	22	3Tr SX01 東 北断削 2 区	土師器	椀	[15.6]	4.5	79	内外面：5YR5/4 にぶい 黄 胎面：75YR6/4 にぶい 黄	密 2.0 (1.0) 長、 石、 雲	ヨコナデ、 ナ デ	ヨコナデ、 貼付け高台、 オサエ	硬	K1/8、 T1/1	
13	104	3Tr SX01 東 西断削 B 区 C 区	土師器	甕	[14.5]	(7.2)	-	内外面：5YR6-6 稲 胎面：5YR6-6 稲	密 1.0 (0.5) 長、 石、 雲	ヨコナデ、 ナ デ	ヨコナデ、 板ナ デ	硬	K1/4	
14	108	3Tr SX01	黑色土器	椀	-	(1.0)	[8.1]	内面：25Y2/1 黑 外面：75Y6-6 稲 胎面：75Y6-6 稲	密 1.0 (0.5) 赤、 手、 ミガキ	ナ デ、貼付 高台	硬	T1/6		
15	102	3Tr SX01 東 西断削	須恵器	椀	-	(1.85)	[6.0]	内外面：25Y6/1 黄灰 胎面：25Y7/1 黄白	密 0.5 (0.5) 長、 石	ロクロナ デ	ロクロナデ、 貼付高台	硬	T1/6	
16	11	3Tr SX01	須恵器	甕	37	8.8	[4.0]	内外面：25Y6/1 黄灰 胎面：25Y7/1 黄白	密 0.5 (0.5) 長、 石	ロクロナ デ	ロクロナデ、 回転系切り	硬	K1は 充 T3/4	
17	15	3Tr SX01	須恵器	甕	-	(2.1)	4.2	内外面：N6/0 黑 胎面：75YR5/2 黑褐	密 1.0 (0.5) 長、 石、 黒	ロクロナ デ	ロクロナデ、 回転系切り	硬	T1/1	
18	103	3Tr SX01 東 西断削 D 区	須恵器	盆	-	(6.25)	[10.4]	内外面：25Y8/1 灰白 胎面：25Y8/1 灰白	密 1.0 (0.5) 長、 石、 黒	ロクロナ デ	ロクロナデ、 余切り	やや 軟	T1/2	

付表 出土遺物観察表

報告番号	実測番号	遺構層位	器種	器形	法量(cm)		色調	胎土	調整		焼成	残存度	備考	
					口径	器高・底径			(内面)	(外面)				
19	106	3Tr SX01	須恵器	碗	-	(135) [5.9]	内外面：N5/0灰 断面：N5/0灰	密1.0 (0.5) 長、 石、チ	ナデ	ケズリ、削 り出し高台	硬	T1/3		
20	110	3Tr SX01 4X区	金属製品	鉄釘	長 (5.4)	厚 (1.4)	幅 (1.1)	-	-	-	-	-	重量 8.5g	
21	117	1Tr 表土 掘削	須恵器	蓋	つま み 部 径 26	(1.3)	-	内外面：5Y6/1灰 断面：5Y6/1灰	密1.5 (0.5) 長、 石	ロクロナ デ	つまみ部貼 付時のナデ、 回転ケズリ	硬	つまみ 部 1/1	
22	122	3Tr 2層 2Z区	須恵器	甕	[19.0]	(7.2)	-	内外面：10Y5/1灰 断面：10YR6/2灰黃褐色	密1.5 (1.0) 長	ロクロナ デ、オサ キ、タカ シ、回転 して具痕	硬	K1/8		
23	123	3Tr 2層 3Y区	綠釉陶器	碗	-	(21)	[6.4]	内外面：25Y7/2灰黃 断面：25Y7/2灰黃	密0.5 (0.5) 長、 石	ロクロナ デ	ロクロナデ、 回転ケズリ	硬	T3/8	
24	116	3Tr 1層 X区	綠釉陶器	碗	-	(15)	[5.6]	内外面(釉)：7.5Y6/3 オリーブ黄 断面：10YR7/4にぶい 黄褐色	密1.0 (0.5) 長、 石	施釉	施釉、回転 系切り	軟	T1/4	
25	115	3Tr 1層 W区	綠釉陶器	碗	-	(1.6)	[7.0]	内外面：N6/0灰 断面：10YR6/2灰黃褐色	密1.5 (0.5) 長、 石	ロクロナ デのちミ ガキ	ロクロナデ、 回転ケズリ	硬	T1/5	
63	121	3Tr 1層	土師器	皿	[6.0]	1.1	-	内外面：7.5YR7/4にぶ い橙 断面：7.5YR7/4にぶい 橙	密1.5 (1.0) 長、 石、雲、赤	ナデ	ナデ	硬	K1/2	
64	118	3Tr 1層	土師器	皿	[9.0]	(1.2)	-	内外面：10YR7/4にぶ い黄褐色 断面：10YR7/4にぶい 黄褐色	密2.5 (0.5) 長、 石、雲	ヨコナデ、 ナサエ、ナ デ	ヨコナデ、 ナサエ、ナ デ	硬	K1/8	
65	114	3Tr 2層 2Z区	須恵器	碗	[120]	35	[5.2]	内外面：25Y7/2灰黃 断面：25Y7/2灰黃	密2.0 (0.5) 厚、 長、 石、雲	ロクロナ デ、ナデ	ロクロナデ、 系切り	やや K1/6、 T1/5		
66	111	3Tr 1層 1Z区	施釉陶器	碗	-	(4.5)	[4.8]	内外面：5Y6/1灰 断面：2.5Y8/2灰白	密0.3 (0.3) 石、 長	施釉	施釉	硬	T1/3	トチン痕 1ヶ所残 存
67	112	3Tr 1層	染付	蓋	つま み 部 径 [4.6]	(24)	-	内外面：呉須 断面：N8/0灰白	密	施釉	施釉、釉ハ ギ	硬	つまみ 部 1/1	
68	120	3Tr 1層	施釉陶器	蓋	口徑 (18.0) つま み 部 径 [5.6]	3.8	-	内外面(釉)：5Y6/3才 内面(釉)：25Y6/3に ぶい黄褐色 断面：N7/0灰白	密0.3 (0.3) 長、 石	施釉	施釉、釉ハ ギ	硬	K1/4、 つまみ 部 1/1	
69	119	3Tr SX02	施釉陶器	土瓶	[9.0]	10.7	[7.0]	内外面(釉)：7.5YR3/4 灰褐色 内面(釉)：10YR6/2 灰黃褐色 断面：10YR6/2灰黃褐色	密0.3 (0.3) 長、 石	施釉、ロ クロナデ	施釉、回転 ケズリ、釉 ハギ	硬	K1/6、 T2/3	
70	113	3Tr 1層 1Y区	燒結陶器	鉢	[20.0]	(4.75)	-	内外面：25Y5/1黄褐 断面：5YR5/3にぶい赤 褐	密3.0 (0.5) 長、 石、チ	ヨコナデ、 ケズリ	ヨコナデ、 ケズリ	硬	K1/12	

表4 瓦、壺の報告番号、実測番号、出土遺構

報告実測番号	遺構層位	報告実測番号	遺構層位	報告実測番号	遺構層位
26	4 3Tr SX01 4Z区	42	19 3Tr SX01 2区 南北断削	56	94 3Tr SX01 南北断削 2区
27	56 3Tr 2層 1Z区	43	59 3Tr 2層 1Z区	57	90 3Tr SX01 南北断削 2区
28	57 3Tr 1層 1Z区	44	26 3Tr SX01 東西断削 B区	58	91 3Tr SX09 4W区
29	7 3Tr SX01 2Z区	45	20 3Tr SX01 南北断削 2区	59	23 3Tr SX01 南北断削 2区
30	30 3Tr SX01 東西断削 B区	46	60 3Tr 南半	60	24 3Tr SX01 東西断削 C区
31	40 3Tr SX01 東西断削 C区	47	52 3Tr SX01 東西断削 C区	61	49 3Tr SX01 東西断削 E区
32	75 3Tr SX01 南北断削 2区	48	16 3Tr SX01 東西断削 C区	62	53 3Tr SX01 東西断削 D区
33	44 3Tr SX01 東西断削 C区	37	3Tr SX02 南北断削 2区	71	125 3Tr 1層 X区
34	1+2 3Tr SX09	49	64 3Tr 表探	72	127 1Tr 南壁精査
35	74 3Tr P-3	50	29 3Tr SX01 東西断削 C区	73	128 3Tr SX02
36	48 3Tr SX01 東西断削 E区	51	TH-1 IK69 (第39集-1) IK73Tr P23	74	130 3Tr 1層 1Z区
37	87 3Tr SX01	52	10 3Tr SX01	75	126 3Tr SX02
38	3 3Tr 1層 1A区	53	95 3Tr SX01 東西断削 C区	76	129 1Tr 表探
39	42 3Tr SX01 東西断削 C区	54	93 3Tr SX01 南北断削 2区	77	131 3Tr SX02
40	14 3Tr SX01 1Z区	55	92 3Tr SX01 東西断削 C区	78	132 3Tr SX02
41	34 3Tr SX01 B区 東西断削				

---

---

図版



1. 調査前風景、シートの位置が8号窓(南西から)



2. 調査前風景、8号窓から北側を眺める(南から)



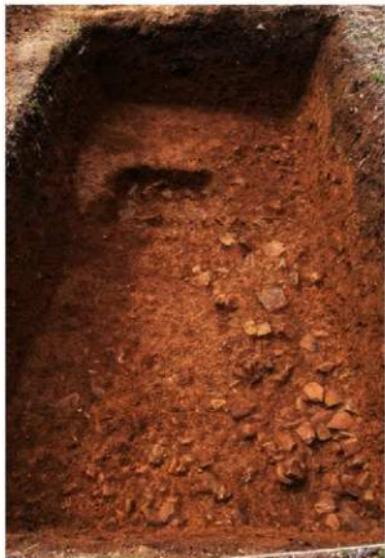
3. 南壁断面（北東から）



4. 東壁断面（西から）



5. 4層・5層掘削状況（東から）



1. 3層上面の瓦出土状況（北から）



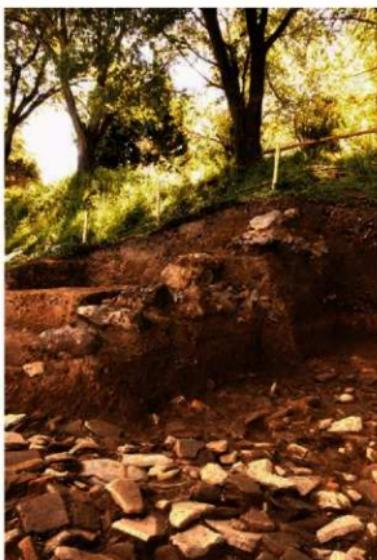
2. 遺構面（4層上面）検出状況（東から）



3. 遺構面（4層上面）検出状況（北西から）



1. 階段状遺構 SX02 全景（西から）



2. 階段状遺構 SX02 全景（北から）



3. 階段状遺構 SX02 断面（北から）



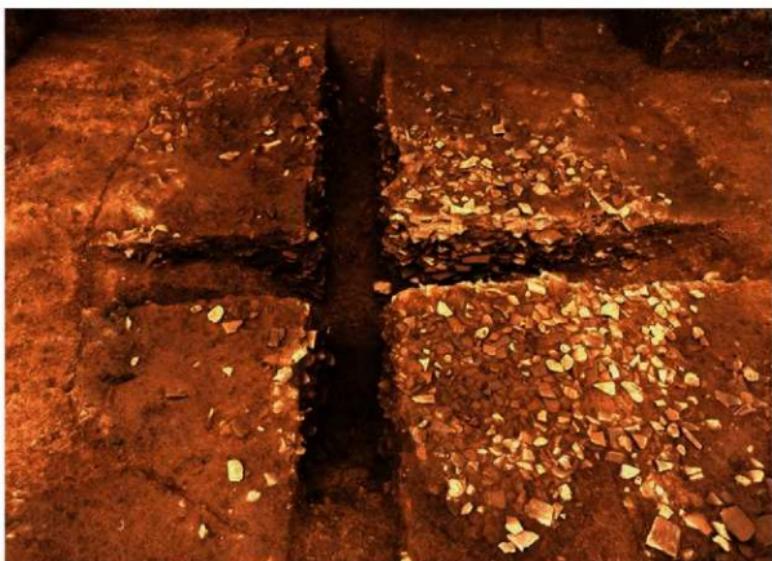
4. 階段状遺構 SX02 遺物出土状況



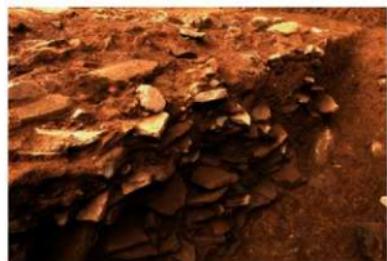
第3調査区全景（北から）



1. 土坑 SX01 検出状況（西から）



2. 土坑 SX01 十字断面掘削後（西から）



1. 土坑 SX01 断面（北から）



2. 土坑 SX01 断面（西から）



3. 土坑 SX01 断面（南から）



4. 土坑 SX01 と不明遺構 SX09 の間の断面(東から)



5. 不明遺構 SX09 北断面（北から）



6. 不明遺構 SX09 南断面（北から）



7. ピット P4 (西から)



8. ピット P4 断面（西から）



1. 不明遺構 SX06 検出状況（西から）



2. 不明遺構 SX06 断面（北から）



3. 不明遺構 SX06 断面（東から）



4. 不明遺構 SX06 断面（東から）



5. ピット P3（南から）



6. ピット P3 断面（南から）



7. ピット P3 土器出土状況（南から）



8. ピット P3 土器出土状況（西から）



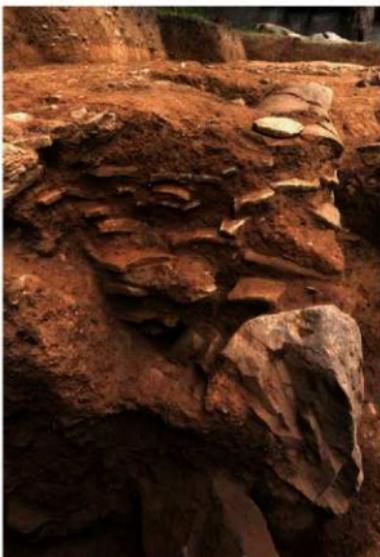
第3調査区全景（南から）



8号窯北半の燃焼室と前庭部（東から）



1. 8号窯北半の燃焼室と前庭部（西から）



2. 8号窯北半の焚口（南から）



3. 8号窯燃焼室背後の壁断面（東から）



4. 8号窯燃焼室の北壁（南から）



5. 8号窯焚口北側の袖の瓦積（東から）



6. 8号窯焚口北側支柱石と袖の瓦積（東から）



1. ピットP22（南から）



2. ピットP22断面（東から）



3. ピットP23・ピットP26（北から）



4. ピットP23・ピットP26断面（南から）



5. 調査区西壁断面（東から）



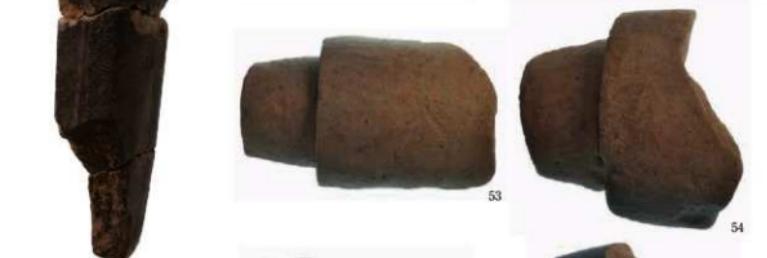
土器、鐵器



軒丸瓦、軒平瓦



軒平瓦



軒平瓦、丸瓦



平瓦、埠、中世・近世の遺物

ふりがな	おおやまざきちようまいぞうぶんかざいちょうさほうこくしょ
書名	大山崎町埋蔵文化財調査報告書
副書名	平成 29 年度国庫補助事業調査報告
巻次	
シリーズ名	大山崎町埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第 53 集
編著者名	角早季子・古閑正浩
編集機関	大山崎町教育委員会
所在地	〒 618-8501 京都府乙訓郡大山崎町円明寺夏目 3 番地 電話 075-956-2101(代)
発行年月日	西暦 2018 年 3 月 23 日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ***	東經 ***	調査期間	調査面積 (m <sup>2</sup> )	調査原因 遺跡範囲 確認調査
		市町村	遺跡番号					
しらぬきいせき 白味才遺跡 (大山崎瓦窯跡)	おおやまざきちようまざわいせき 大山崎町字大山崎 こあづしらぬきい 小字白味才 39-3	26303	32	34° 53' 37.88"	135° 41' 10.79"	170221- 170704	83.7	遺跡範囲 確認調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
白味才遺跡 (大山崎瓦窯跡)	瓦窯	平安時代 中世・近世	瓦窯、土坑	土師器、須恵器、綠釉陶器、軒瓦、丸瓦、平瓦、埠	8 号窯北側に土坑を検出した。

平成30年（2018）3月1日 印刷  
平成30年（2018）3月23日 発行

『大山崎町埋蔵文化財調査報告書』第53集  
—平成29年度国庫補助事業調査報告—

編集・発行 大山崎町教育委員会  
〒618-8501 京都府乙訓郡大山崎町円明寺夏目3  
電話075-956-2101（代表）

印刷 三星商事印刷株式会社  
〒604-0093京都市中京区新町通竹屋町下ル  
電話 075-256-0961（代表）